
反転・遊戯 ―リバーズ・ゲーム― 4 (仮)

神代家家長

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

反転・遊戯ーリバース・ゲームー4（仮）

【Nコード】

N1865J

【作者名】

神代家家長

【あらすじ】

反転・遊戯ーリバース・ゲームー3（仮）の続き。

第一章（前書き）

3巻（仮）に対しての純粋な続き話です。もしも書きなおす必要がある時は3巻（仮）からなので4巻も（仮）が付いています。

第一章

『リバーズ。次に指令が着たわよ』

「またかよ」

俺はウンザリした声で眼鏡に表示された文字に対して嘆息する。

ここ最近、俺に対して休みなしに仕事を言いつけられる為、元より仕事に対して真面目ではなかった俺は不機嫌極まりない状況なのだ。

『どうする？サボる？』

「はあ。まあ、とりあえず行ってみるよ」

『了解』

俺はやる気なしを体全体で表現しながらも眼鏡——相棒であるテンペストの指示に従って歩き出した。

前回。

吸血鬼の末路ともいえる化け物に襲われた本部は未だに復興していない。テンペストの話では15階層まである地下施設にまで致命的なダメージを負っていたようで中に居た人間の生存は絶望的だとか。

一応外部にもいくつか端末的組織は存在するものの本部は事実上壊滅したと考えて間違いないらしい。鉄壁の護りを誇る本部施設だからこそ、それを過信した上層部の人間が一同に集まっていた事が裏目に出た訳だ。

勿論、上層部がほぼ一掃されたと言っても全滅ではなかった。

だが残った一部の者も数は少なく一番重要な部分——資金提供という重要事項がクリアされなかった為、本部はあえなく壊滅。言い方を換えれば倒産した。

今まで数十人もの富豪によって成り立ってきた本部の維持を数人でまかなう事など不可能だった訳だ。

そして俺達は後ろ盾を失った。



「ただいま」

「お帰りなさい」

疲れた声で帰ってきた俺を出迎えるのはテンペストを初めとした4人の扶養家族。

「その様子じゃ聞くまでもないと思うけど、どうだった？」

「ダメだな、こりゃ。小さい仕事ばかりコツコツ回されるだけで、まともな活動がされているかも怪しい」

「やっぱりね」

何の話なのかと言うと今現在俺が所属する事になった能力者組織への評価と言う奴だ。本部以外にも能力者を研究して生み出した組織はいくつか存在すると言う事は知っていた。だから、そこを新たな後ろ盾にするべく接触を試みたのだが――。

「本部の対抗組織だと言うから少しは期待していたがネタが割れば本部のおこぼれを貰うだけの弱小組織。俺達の後ろ盾にするには弱すぎる」

「やっぱり本部の端末にアクセス出来なくなったのが痛いわね。信用面は兎も角、情報面では本部は最高ランクの組織だったもの」

「嫌々仕事をして集まった情報が期待外れだと益々疲れるな」

脱力してソファに腰掛けた俺を見かねてかミタマ――神剣『御魂得の剣』の化身である少女が後ろに回りこんで肩を揉んでくれる。

「主様、別にそれほど焦らなくても良いんじゃないやありませんか？資金面では別に困っていないのでしょう？」

「んー。そうなんだけどね」

確かにミタマの言うとおり俺が本部で仕事をして稼いだお金はかなりの額に上っているし、このマンションも本部名義であったものの支払済みという事で家賃すら払う必要がない。

しかし――。

「それだと得意の『横取り』が出来ないから面白くないのよ。リバーは――」

「あゝ。なるほど」

そう。そうなのだ！

確かに今、俺達に当面の生活には支障がない。支障はない物の、否、支障がないからこそ娯楽が必要になる。そして俺にとっての最大の娯楽とは『横取り』に他ならないのだ。

「これだけ居て、まだ物足りないのですか。貴方は」

その俺に呆れた口調で語りかけてくるのは白く透けるような美しい女――『白面金毛九尾』の玉藻。ミタマも玉藻も俺が横取りをしてきた面々なのだが――。

「浪費家の癖になかなか発言だな。玉藻」

「う」

彼女達は殆ど一日中家の中でゴロゴロしているか買い物でウロウロしているかくらいしかしていない。たまゝに俺の仕事に付いてくる事もあるのだが特に手伝う訳でもなく『暇だから付いてきた』というレベルの話のようだ。

「だって毎日退屈なのですもの。リバーの日中は構ってくれないし」

「一般家庭の夫婦だって旦那は昼は仕事している物だろ？」

「・・・夫婦」

何故か俺の言葉にポツと頬を染める玉藻。なんか幸せな奴だな、コイツも。

「それよりセシリアは？」

あと一人。吸血鬼の令嬢セシリアがこの家には住んでいるのだが姿が見えない。

「さあ。あの女は昼間は寝ていますから。外へ散歩にでも行ったのではありませんか？」

「ホント、気楽だよなあ。お前ら」

まあ俺が勝手に横取りして養っている訳だから文句を言う筋合いでもないのだが。

★ 吸血姫

夜。

私にとって快適で過ごしやすい時間、私は街中を気ままに散歩して周っていた。

散歩と言っても吸血鬼である私は人間のように地べたを這いずり回る事無く空を悠々と散歩中だ。吸血鬼の能力にはいくつか種類があり蝙蝠や狼などに化身する事も出来る訳で、その応用で羽織った黒い外套を蝙蝠の性質へ化身させて私の体を持ち上げている訳だ。

「・・・」

本当ならこんな面倒な手順を踏まずに普通に蝙蝠へと化身すれば良いのだが最近の私はリバースに血を貰っているせいか力が有り余っている為ちよっとした無駄遣いをしている訳だ。

女版リバースの血は本当に私の嗜好に合うようで少量の血であっても回復度が恐ろしく早い。

そんな訳で私は空の散歩を楽しんでいた訳だが――。

「ん？」

不意に視線を感じた。

夜と保護色になる黒で統一された服装の私を見つけられるような人間は鏡の能力者テンペスト以外には考えられない。だが、この視線はテンペストの物ではない。

なら答えは簡単で視線の主は人間ではない。即ち私と同じく人外の物という事になる。

私はそう結論を下し、視線を感じる方へと方向転換する。

友好的かどうかは分からないが少しだけ興味が沸いた。

「こんばんは。良い夜ね」

「・・・」

ビルの屋上、フェンスの上に立ちながら私は視線の主へと挨拶をし沈黙で返される。

「この街に私以外の吸血種が居たとは驚いたわ」

視線の主である彼女――女性だった――はどうやら私と同族であつたらしい。

「何か用？」

「視線を送っていたのは貴方の方ではないの？」

「・・・」

私の言葉が凶星だったのかバツの悪そうな顔で視線を背ける彼女。

「別に用があった訳じゃない。ただ同族を見かけるのは久しぶりだったから」

「そうね。私達は人間と違って同族に頻繁に会う事なんてないもの」
元々も数が少なかった上に祖国を滅ぼされた吸血種は絶滅種並に数が少ない。だからこそ私は王家の最後の生き残りであるイニアス様に希望を持っていたのだが――。

「どうしたの？」

「いいえ。なんでもないわ」

苦い思い出が蘇りかけて私は頭を振って気持ちを切り替える。

暴走してしまったイニアス様を討ったのはリバス。しかし、その事でリバスが責めるのはお門違いと言う物だ。イニアス様のお世話を放棄したのは私で、今の生活を望んだのも私なのだから。

なのにリバスは私に言う。

『別に俺を恨んでも構わない』と。

恐らく変に私が自分で自分を追い込むよりも手近な誰かを恨んだ方が負担が少ないと思つての発言だと思う。そんなリバスの心遣いがグツと心に来てしまい結局恨む事も出来ずリバスの傍でぬくぬくしている訳だ。

恐らく、間違ひなくリバスの計算づくの発言であつた事は間違ひないと思うのだが、やはりグツと来る言葉は来てしまうのだ。

「ところで、こんな所で何をしていたの？」

苦い思い出から浮かれた思い出まで隠すように私は目の前の彼女に質問する事にする。

「別に。暇だったから」

「そうなの？」

「貴方が知っているかどうか知らないけど、この街この間まで凄く警備が厳重な所で血を吸うだけでも危険だったんだけど何故か最近では警備が緩くて血を吸うのも楽になった。だから暇が出来て月を眺めていた。それだけよ」

「ふーん」

警備が緩くなった理由はリバースの所属していた本部が壊滅的打撃を受けたせいだ。そして本部に壊滅的な打撃を与えたのは何を隠そう暴走したイニアス様だ。その意味で言えば彼女が安全になったのはイニアス様の功績と言えるのだが勿論口に出したりはしなかった。

「貴方は？」

「え？」

「貴方こそ、こんな所で何をしていたの？」

「私は夜の散歩を楽しんでいたのだけだけど」

「散歩？」

何故か彼女は私の言葉をいぶかしむ。

「警備が緩くなったとはいえ、この街にはまだまだ私達を狩ろうとする者が大勢居るわ。その街で悠々と散歩を楽しめるなんて・・・貴方何者なの？」

「何者と言われても・・・」

流石の私も回答に困る。

私が夜の散歩を呑気に楽しめるのは本部施設が健在だった頃にテンペストが本部の端末から引き出した『この街の警備情報の穴』を知っているからだ。それは本部が壊滅した今も実は余り変わっていない。

しかし、それを馬鹿正直に目の前の彼女——同族とはいえ初対面の者に話す気にはなれない。何より今現在の私が人間の庇護下に居る事を知られたくなかった。

「答える気はないのね」

スツと目の前の彼女の目が細まり周囲の温度が下がる。

「貴方、何かおかしいわ。この街で生きるには決定的に緊張感が足りていない。なのに凄く余裕がある」

「何が言いたいのかしら？」

「気に入らない」

私は外面では溜息を吐いて嘆息しつつも内面ではホッと安堵を憶えていた。下手に友好的に疑われるより、こうして敵意を向けられる方が気が楽だった。

しかし油断は出来ない。

目の前の同族の彼女は目を紅く光らせ周囲に凍るような殺気をばら撒いて力を解放している。目の前の彼女の体重は私とそう変わらない筈なのに足元のコンクリートが重圧に負けて陥没する。恐らく体重ではなく力の大きさに足場が耐え切れなかったのだろう。

「最期通達よ。私の質問に答えなさい」

私は彼女の言葉に肩を竦めて嘆息で答えた。

「殺す！」

そして彼女は私を完全に敵と認識して襲い掛かってきた。

「少しリバーズの癖が移ってしまったかしら」

「うぐぐ」

私は彼女——襲い掛かってきた同族の吸血鬼の首を掴んで壁に押し付けながら、また嘆息する。

正直な話をすれば初めから彼女が私の敵ではない事くらい分かっていた。キャパシティ許容量は勿論の事、雑種の血を啜って生きている彼女と嗜好に合った血を力に取り入れている私とでは戦力に差がありすぎた。他にも私が純正の吸血鬼であるのに対して彼女がいくらか異物が混

ざっている事など上げれば限がないほどに私が負ける要素がなかった事は明らかだ。

それを全て分かった上で私は彼女の神経を逆なでする形で挑発し私にとって都合の良い戦場を作り上げた。

結果、私は罪悪感が無縁の勝利を手に入れた訳だ。

「・・・」

もっともリバースなら私などでは想像もつかないずるいレベルで戦場を整えただろうけど。

「さて。私の勝ちみたいね。どうしようかしら」

「こ、殺しなさい」

「別にそれでも良いのだけど・・・」

リバース流に言えば『それではつまらない』ではないか。

「ふゝむ」

「な、何？」

改めて彼女を見るが鼻眉目に見ても私が容姿で負けているとは思えない。それに彼女の境遇を考えてもリバースの嗜好にヒットするとは思えない。ならリバースへの手土産と言う案は却下だ。まあ、そんな事をすれば他の同居人に睨まれるという事もある。

「まあ折角だしね」

そう。折角だから――。

「丁度、便利な小間使いでも欲しいと思っていたところよ」

「な!？」

私の言葉の意味を理解したのか私に首を押さえられたままの彼女の顔色が変わる。

「や、やめ・・・」

「大人しくしなさい」

「むぐ!」

空いた手で強引に彼女の口を開かせ、そこへ――。

「むが!」

数滴――ほんの数滴だけ私の血を流し込んでやった。

「ぎ。があああ!!!!!!」

「あら」

それだけの事なのにもがき苦しみ、私の手を逃れた彼女は床を転がりまわって苦しむ。

「無駄なのに。無駄な抵抗は自身への苦痛を増やすだけよ」

「ぎああああ!」

同族に己の血を飲ませる事。それ自体は特に大事ではないが、この場合は普通とは意味が異なる。

「あが。あがあああ!」

私が彼女の中へ送り込んだ血は彼女を私に隷属させるべく彼女の中で暴れまわる。そう。私が彼女の中へと送り込んで血液にはそういう因子を含ませておいた。それ故に彼女は私に隷属する事を強制させられ――それに逆らう故に血の制裁を受けて苦しんでいる。

「まあ、この調子なら持って数分ね」

そして一度隷属を受け入れてしまえば二度と私に逆らう事など出来なくなる。

「ふふふ」

別に彼女のような使い魔が欲しかった訳でないが、なんとなく楽しくて笑いが出る。ひょっとしたらリバーズがいつも『横取り』する時、こんな気分なのかもしれない。

「ああああ!」

そして予定通り数分で彼女は私に隷属を決意したようだった。



「それで連れて来ちゃった訳?」

「うん。ダメだった?」

「ダメって訳じゃないが・・・」

散歩から帰ったセシリアは見知らぬ女性を連れて帰ってきた。セシリアの話では彼女と同族の吸血鬼らしいのだが――。

「もうこの家に部屋は残ってないんだが」

「それは大丈夫。この子は私の用事がある時にだけ呼びつけるだけだし。今は貴方に紹介する為に連れて来ただけよ」

「あ。そなんだ」

何故かセシリアはあっけらかんとして彼女を『奴隷にした』と笑顔で言っただけ。

「それにしても・・・奴隷ねえ」

「ん？リバース、欲しいの？」

「・・・いらね」

完全に他人の物という一点において嗜好が働くかと思ったが興味が沸いてこなかった。

「それはそうでしょう。セシリアはもう貴方のものだし、そのセシリアの奴隷に貴方の嗜好がヒットする訳がない上に・・・」

「上に？」

「彼女、貴方のタイプじゃないしね」

「・・・」

なんだが図星を突かれたみたいでテンペストに反論出来なかった。

紆余曲折はあったものの、この部屋の同居人が全て揃ったという事で簡単な会議を始める事にした。

「それで、今後どうするかでしたっけ？」

「いや。そんな大げさな事でもないが一応方針の修正かな？」

会議とは名ばかりで発言者も適当なら、お茶を飲みながらの場なので緊張感の欠片もない。

「一応、俺が片っ端から組織と渡り歩いてみたが今の所、俺達に有益となるような大きな組織は見つかっていない」

「私の方も独自に組み上げた情報網で検索にかけてはいるけれど本部に居た頃ほどの情報網を作り出すにはまだまだ時間がかかるわ」

俺の結論に対してテンペストが後を継ぎ、あっさりと会議の場は終わってしまった。実質的に動いているのは俺とテンペストだけだ

から。

「それじゃ方針は今まで通りという事で・・・」

「あ。ちよっと良い？」

そんないつもどおりの展開に俺が締めを行おうとした所に控えめにセシリアが挙手して発言の許可を求めてきた。

「今日あの子を隷属させてから思ったのだけど私があの子を使って、この街に一勢力を作り上げると言うのはどうかしら？ 私自身が感染の因子をバラまくのはどうかと思ったけれど、あの子で代用出来るのならやってみても良いと思うから」

「感染って生きている人間に対しては成功率が恐ろしく低いんじゃないのか？」

「吸血鬼化する方の感染は、ね」

「ああ。そういう意味ね」

少し意味深なセシリアの発言に俺は彼女の狙いを看破する。確かに吸血鬼化させる事に対しての感染率という物は恐ろしく低いのだろうが吸血鬼の血というのは何も吸血鬼化させるだけの物ではない。

吸血鬼の血液の効果にはいくつか種類があり吸血鬼化以外にも今回セシリアがやったように『隷属化』の因子も含まれている訳だ。そして恐らくそれは吸血鬼化ほど成功率が低くはないのだろう。

「なるほどね。俺達が求める組織を探し出すのではなく作り出す、か。確かにあるかどうかとも分からない組織を捜し続けるよりも建設的だが・・・」

「少なからず時間が必要になるでしょうね。だから私の案をセカンドプランとして私の単独での行動を認めて欲しいの。どれほど時間が掛かるか分からないのだから無駄に人手を割く事もないでしょう？」

「ふむ」

これはある意味セシリアにとっては成長する為の良い選択になるのかもしれない。これは俺の感情を抜きにすればセシリアが自分で考え、自分で行動を起こした、セシリアにとって世間知らずと言う

汚名を返上するチャンスなのだろう。

「・・・一晩考えさせてくれ」

「え？ええ」

だが、それでも俺は時間を引き延ばした。

★ 吸血姫

私は自室で棺桶型のベッドに腰を掛けながら先程の予想していなかったリバースの曖昧な返答に戸惑っていた。リバースならば、あの場でキツチリ結論を出してくれるだろうと思っていたのに。

だからと言う訳ではないが深夜、私の部屋をノックされた時は『やっぱり』と思ってしまった。

「入るぞ」

私の部屋に入ってきたのは勿論リバースだ。

「今日は、まだ血を貰わなくても大丈夫なのだけど。何か御用？」

「惚けるな。さっきのセカンドプランの話だ」

「・・・」

やはりそっちの話になるか。

「結論から言ってしまうえば俺は応援するべきなのだろうな」

「それじゃ・・・」

「世間知らずで我侬だったセシリアが自分で考えて自分でやりたいと言ってきたのだから俺に止める理由なんて何処にも存在しない」

「うん。それじゃ・・・」

私は自分の中で二つの感情が闘ぎあうのを無視して笑顔を生成し――。

「だが俺は反対する」

「・・・え？」

その笑顔が瞬時に凍りつく。

「ど、どうして？」

「理由は3つほどある。1つ目はお前が今、自分で思っている以上

に焦っているという事。恐らくは俺があのかきを始末した事に対する確執をまだ拭いきれて居ないんだろう。だから今お前は自分が『何かをしなくてはいけない』という強迫観念に支配されていると言う事に自分で気付いていないのが1つ目の理由」

言いつつリバーズは右手の指を一本立てる。

「2つ目はお前が俺の行動に対して焦れているという事。俺が昼間に弱小組織を周って一向に方針を更新させない事に対してお前は『自分ならもっと上手くやれる』と思っているだろうと言う事」

言い終えると同時に右手の指を更に一本増やす。

「ここまでで何か反論は？」

「・・・」

私は少し自身の心境に付いて思考する。私がイニアス様の死に対して焦りを覚えている？更にリバーズの行動に焦れている？

「そんな事はない。私は十分冷静よ」

「そうか？」

「ええ。私は十分考えた結果として自分が何をすべきか。そして自分に何が出来たのかを吟味してセカンドプランを提案したのだから私の中にリバーズの言葉に対する揺らぎは見つけられなかった。」

「それで3つ目は？」

「ああ。3つ目はごく個人的な理由なんだが・・・」

リバーズは3つ目の指を立てながら――。

「俺がお前個人に対して俺の傍から離れて欲しくないから」

きっぱりと迷いなくその言葉を私に言い切った。

「な・・・」

何て自分勝手に理由にもならないような理由。前2つと比べても全然理論的でもないし前向きでもない。全く、全然、これっぽっちも私の組み立てた論理を崩す要素のひとつもなく――。

「く！」

それ故、私は必死に唇を噛み締めた。

リバースの事は『ずるい人』だと聞いていたし私自身もある程度はその認識を自覚はしていた筈なのに——直撃された。

はつきりと『やられた』と思い知った。

リバースはちゃんと私の事を理解していたのだ。私がセカンドプランを立ち上げた理由——。

「気付いて・・・いたんだ」

「何の事？」

彼は惚けたけれど、その目には紛れも無く『理解の色』が浮かんでいた。私の思い違いなんてありえない。この人は私よりも一枚も二枚も上手だった訳だ。

私がセカンドプランを提案した本当の理由は表向きには確かにリバースの支援組織を創立と言うお題目があるのだが無論、裏の御題目が存在した。

私が率先して指揮を執り組織と言う物を統率する事になれば一つの関係が崩れ去る。即ち、『私がリバースの下に居る理由』が。

時間を掛けてセカンドプランを熟成させた暁には私は——リバースに反旗を翻すつもりだった。

リバースの事は嫌いではない。いえ寧ろ並々ならぬ好意すら持っているだろう。

けど彼はイニアス様を——私達吸血鬼の最後の希望を討ったのだ。これが唯の逆恨みになると言う事は重々承知していた。だからこそ私は彼に対して最後のチャンスを与えた——与えた——つもりだった。

「ずるいなあ」

「良く言われるよ」

私が彼に与えたと——与えたと思い込んでいたチャンス。それすらも結局、彼に利用されてしまっていたのだ。

彼に与えた最後のチャンスとは即ち『私の自立を認めてくれるか』

それとも『私を納得させる形で引き止めてくれるか』。

自立を認めてくれるようなら私は今後、迷う事無く最後まで走り抜けリバースを討つつもりだった。けれど私を納得させる形で引き止めてくれるなら――彼の元を去ろうと思っていた。

けれど彼は私の全ての思考を余す事無く読みきり――私が思い留まるどころか彼の元から離れられないようにと画策されたのだ。

これは可能性の話だが将来的に対立し殺し合いを演じる私とリバース。その図式の根源を覆された。恐らく敵対する事でありえた感動的なイベントも想定出来た筈なのに、それを全て読みきった上で『私を傍に置く事』を選んだ――選んでくれたのだ。

「何事も話を聞くのと体験するのじゃ大違いだね。私、何も出来なくされちゃった」

「嫌なのか？」

「本当ずるい人」

そもそも今になって考えてみれば最初からおかしかったのだと気付くべきだった。第一に『あの』面倒臭がり屋のリバースが真面目に仕事をしている事に対して疑問を持つべきだったのだ。

あれは本気で後ろ盾を探していた訳じゃなく私に対して画策する場を整えていただけだった。私が彼の行動に焦れるように。彼の助けになろうと考えて私の進むべき道を自分で気付かせる為に。そして、その全てを否定出来るように。

「ねえ。最後に一つだけ教えて」

「ん？」

「貴方にとって私って何？」

これが私に出来る最後の抵抗。この質問に対しての答えは重要ではない。重要なのは答えに至るまでの時間。もし答えに至るまでに少しでも時間が空くようなら――。

「比翼」

「え？」

呆氣に取られた。一秒も思考する事無く、それ以前に私が答えを待ち受ける心構えをするよりも早く答えが帰ってきてしまった。

だから痛快なまでに思い知った。

私は何て浅はかだったのだろう、と。

「そもそも貴方に対して貴方の得意分野で勝負を挑んでしまった事が間違いだった」

「何の話かね」

答えなんて、とっくの昔に用意されていたのだ。それはつまり彼にとって私と言う存在は既に完全に理解の範疇に居たという事。私は何を考え、何を望み、何を欲するのかなんて既に分かりきった、考えるまでもない問題だったらしい。

完敗。とても敵わない。

その言葉が私の頭を支配した。

私は今日あの同族の子を見つけた時に天啓を得たのだと思った。この子を利用してリバーズを私の掌で躍らせてやろうと画策して、その天啓すらもリバーズの掌の上で踊っていただけだと気付けなかった。

リバーズはもっと早い段階から私がリバーズに対して画策するだろうと『確信』していたのだ。だからこそ私に対する策を入念に準備した上で私が彼に対して画策するのを『待っていた』。同族の子と出会った事など所詮、想定内の『きっかけ』に過ぎなかったのだ。「比翼、か」

伝説に存在する架空の夫婦鳥。片翼しか持たない二匹の鳥は片方が死んでしまえばもう片方も飛ぶ事が出来ずに死を待つしかない。

『お互いを絶対に必要とする』と言う意味の例え話だ。

『テンペストじゃあるまいし』と思った。思っただけで言葉は出なかった。

もし、ここに他の誰かが居たならば私は色々な事を思い留まっていただろう。でも現実問題ここは私の部屋で私と彼しか居なくて、そして彼が私の提案を一時的に伸ばしたのはこの為なのだと理解す

る。

「どうやら私は素直になっても良いらしい。

誰にも見咎められる事も無く彼に甘えても良いらしい。

今日は彼を独占しても良いらしい。

全ての準備は既に整えられていた。

「はあゝ」

熱い吐息を吐き出しながら私はベッドから立ち上がりリバースの方へと近づいていく。

「気が変わったわ。一つお願いがあるのだけど良いかしら？」

「何？」

「血を、貰いたいの」

言いながら私はリバースの首に両腕を絡ませる。

「ちよっと待ってくれ。今女の方に・・・」

「良いから」

女性版の方へと反転しようとするリバースの行動を押しつけて私はリバースを力強く引き寄せて、その首筋に牙を突きたてる！

「う！」

以前は私の嗜好に合わない血という事で彼の血を受け入れる事は出来なかった。けれど今、私が嚥下する彼の血は――。

「あが・・・ま、待てセシリア、それ以上は・・・」

この味。この匂い。そしてこの体温。たまらない。気が狂いそうになる。

私はリバースの言葉に全く耳を貸す事無く彼を力の限り抱きしめ――骨の碎ける音を心地よく聞きながら尚も血を吸い上げた。



「で。どういふつもりだ？」

「あ。うん」

理性をあっさり放棄して俺の血を吸い尽くしたセシリアを問い詰

めるが返答は非常に鈍い物だった。

熱に浮かされたようにボンヤリしながら俺を見つめている。

「貴重なストックを一つ消費させた事に対して納得出来る説明をしてくれるんだろうな？」

そう。俺はセシリアに際限なく血を飲み干された上に骨がバキバキになるほど抱きしめられて――死んだ。

俺の『リバーエネペラー転生皇帝』の能力が無かったら一卷の終わりだった。

「話には聞いていたんだけど、こんなに凄いととは思わなかったから」「何が？」

「吸血鬼のね、吸血衝動がどうして起こるのか知ってる？」

「力の減少・・・つまり空腹によってじゃないのか？」

「半分、いえ二割位は当たっているわ」「？」

この曖昧な答え方と先程のセシリアの言動を省みるにセシリア自身も気付いたばかりの答えなのかもしれない。

「確かに力の減少によって生存に必要なエネルギーを取り入れる為の本能が吸血鬼の吸血衝動を呼び起こすのは間違いないわ。でも、それはあくまで生きる為に必要な処置であって極端な話10年に1度血を吸うだけでも生存に支障はないの」

「確かに俺と出会う前は随分血を吸っていなかったと言っていたな」
血を吸っていなかったと言っても他の食事はしていたらしいので決定的と言わなくとも、ある程度は他の食事で代用出来るという事なのだろう。

「だから、それとは別に吸血鬼には吸血衝動を呼び起こす『原因』が存在するの。吸血鬼にとって血を最高潮に美味にする最大の調味料。それが貴方の血を処女の生き血以上の嗜好に変えた」

まっすぐに俺を見つめるセシリア。その彼女の瞳が紅く爛々と輝いているのを見て俺はギクリと身を固める。

「そ、その調味料ってなんなんだ？」

知らず俺の声に動揺が混じる。聞いてはいけないと思いつつも俺

はその質問をしてしまった。

「愛情よ」

その決定的な答えを口にするセシリアの声に背筋が凍る。

「対象を愛していれば愛しているほどに、その血は吸う側の吸血鬼にとって最高の嗜好に変わる。それは空腹に対する吸血衝動とは全くの別物・・・別次元と言っても良いわね。だってあれだけ血を貰ったのに私・・・」

彼女の紅い瞳が俺を捕らえる。

「まだ全然飲み足りないんだもの」

「お、おい。もうストックが・・・」

「分かっているわ」

目を瞑り、頷くセシリアに俺は安堵を覚え――。

「分かっているのに理性が蕩けてしまいそうな位、貴方の血が欲しいの」

再度背筋が凍りつく。

「吸血鬼の愛情がこんなにも業が深い物だとは思わなかった。対象が枯れ果てるまで血を吸い上げ、背骨が折れるほど抱きしめたのに、それでも満足出来ないなんて」

「・・・」

「ねえ。ストックってもう一つ残っているのよね？」

「ちよ！待て。今の状況で全てを使い切ったら・・・」

「ごめん。ごめんね」

謝りながらもセシリアの行動には全く迷いが無かった。

「ああ。愛しているわ、リバーズ」

俺を再度その腕に捕らえ迷う事無く首筋に牙を突きたてる。

そして――俺は最後のストックを失った。

第一章（後書き）

第一章はもうちょっと作りを明確にしたかったのですが、うまく表現できないまま完成になってしまいました。

第二章

翌朝。

俺は予想外の展開に頭を抱えていた。

「不味いなあ。今の情勢下でストックの補充なんて目処が立たないぞ」

ストック―5人の人間の死を目撃する事で俺を理想の形で転生させる為のエネルギーの確保。それを昨晚のセシリアの吸血で使い切ってしまった。

以前まで―つまり本部の下で働いていた頃なら何の問題も無かったストックの補充なのだが本部が壊滅と同時に困難な事柄へと変化してしまっていた。

俺の能力を持つてすれば5人や10人を殺す事など造作もない。

問題になるのは死体の始末だ。

今までなら本部の下っ端が処理していくくれた作業も個人で行うとなると大仕事だ。例えば今人間一人分の死体を作り上げるとすると、その死体その物は勿論、痕跡などを完全に消し去るのは非常に困難だ。

開き直って死体を放置すれば警察が動き出す。結果、追われる身となり身動きが取れなくなってしまう。

そういう訳で今まではセシリアに対する演技として組織を渡り歩いていた俺が今度は本気で後ろ盾を探さなくてはならない事態の陥ってしまった。



「テンペスト。何か情報は？」

「本腰を入れた初日から都合の良い情報が集まる訳がないでしょう」

「参ったな、こりゃ」

「自業自得じゃない」

本来味方になる筈のテンペストも今日ばかりは機嫌が悪い。勿論、覗き見していた事は承知の上だったのだがセシリアが男の俺に吸血衝動を覚えたという事は本気で俺を愛しているという事の表れだからだ。

これはある意味、俺とテンペストにとっては急展開と言わざるを得ない。今まで頑ななまでに男の血を拒んできたセシリアが理性を失うくらいに俺の血を求めているのだから。本当に困った事態ではあるのだが――。

「なんだ。またヤキモチか？」

「な！」

こういう反応をするテンペストをやはり可愛いと思ってしまうのも事実だった。

「構って欲しいなら素直に言えば良いのに。お前って本当に可愛いよな」

「・・・違うもん」

拗ねるテンペストの隣に移動して俺は肩に手を回して――。

「ふああ。おはようございます」

「な!？」

驚愕に目を見開く。別にテンペストとイチャ付いている所に誰かが現れたからではなく――。

「な、何やってんだ。セシリア！」

「はい？」

「まだ昼だぞ！昼！」

扉を開けて居間に入ってきた人物がセシリアだったからだ。

「それが何か？」

本気で気にもしない調子で居間へ――窓からサンサンと日光が降り注ぐ部屋へと入って来ようとするセシリア。

「どわわわ!!!!」

俺は慌てて立ち上がり部屋中のカーテンを閉めて回る。吸血鬼で

あるセシリアが日光を浴びたらどうなるかなんて考えたくもない！
「ご苦労様です♪」

汗だくになりながらカーテンを閉め終えた俺にセシリアがニッコリと微笑みかける。そして当然の事ながらテンペストが益々機嫌を損ねていた。

なるほど。これが狙いだったのか。

「勘弁してくれよ」

「私も今までは特に気にならなかったのですが今は凄く気になります。貴方が私以外の人と仲良くしていると思うとモヤモヤして我慢出来なくなるくらい」

「だからって日の当たる部屋に入ってくるなよ」

「貴方ならきつと、こうしてくれるだろうと信じていましたから」
「・・・」

重症と言うならこれ以上なく重症なのだろう。『吸血鬼が』男の気を惹く為に『日の光の中へ』と入ろうとしたのだから。

「ところで話は変わりますが・・・」

「ん？」

「ストックの補充は出来ましたか？」

「・・・おい」

まだ昼間だと言うのに、しかも昨夜あれほど俺の血を飲みまくったと言うのに俺を見るセシリアの瞳は紅く爛々と輝いていた。

「ストックの補充は目処も立ってないよ。今セシリアに血を持っていかれたら俺はお陀仏確定だ」

「そうなんですか」

がっくり肩を落とすセシリア。どうでも良いけど毎回ストックを使わせるくらい血の持っていく気か。この女。

「それじゃ仕方ないですね」

「ああ。少なくともストックが揃うまで血を吸うのは我慢して・・・」
「」

「死なない程度の留めて置きますね」

「は？」

言葉の意味を理解した時、既にセシリアは俺に抱きついて首筋に牙を突き立てていた。

「ま、待て！今は本当にやめ・・・が！」

俺を抱きしめる力が加速度的に加重されていき俺の息が詰まる。

更に俺に牙を立てたセシリアは急速に俺から血を吸い上げていき目の前が真っ暗になって意識が――。

「やめなさい。この馬鹿女！」

「きゃん！」

唐突に圧迫が開放されて意識が戻る。

何事かと思えば頭を抱えたセシリアが涙目で自分を殴った人物を睨みつけていた。

「玉藻か」

助かったのだと理解してホッと一息つくと同時に俺は膝が崩れ、その場に座り込む。短時間とはいえ、かなりの量の血を持っていたらしい。

「な、何をするんですか！邪魔をしないでください！」

「正気に返りなさい。貴方は今リバースを殺すところだったのよ」

「あ」

やっと自分が我を忘れていた事に気付いたのかセシリアは申し訳なさそうに俺を見つめ――。

「もう一口だけ飲んじゃダメ？」

全然、反省してなかった。

ミタマに体を活性化して貰いつつテンペストに点滴と増血剤をうつてもらい何とか命の危機を脱する事が出来た。

「リバースも迂闊です！この女が昨晚した事を考えればもう少し警戒してしかるべきでしょう！」

「すまん。完全に油断してた。まさか昼間から襲い掛かってくるとは」

何故か玉藻に説教を食らいながら俺はクラクラする頭で受け答えする。命の危機が去ったとは言っても急速に血を抜かれた事に変わりのないのだから。

「ストック。ストックさえあれば良いのよね。ストックさえあれば」
そして熱に冒されたような熱い視線で俺を見つめる捕食者が一名。どうやらトロトロに溶けた頭の中は俺に対する吸血衝動でいっぱいになっているらしい。

「どうするの、あれ？」

流石にこの状況でヤキモチ云々を焼いている場合じゃないのか困った目でセシリアを眺めるテンペスト。

「女に反転でもすれば良いではありませんか。以前とは逆の対応ですが今のあの女からすれば多少は改善されるでしょうし」

「ああ。なるほど」

俺は玉藻の意見を採用して早速女へと反転する事にした。

「えゝ。今更女の血は別にいらないんだけどなあ。んゝ。でもリバスには変わりない訳だし、どうしようかなあ」

「・・・」

本気で早目に何とかする必要があるそうだった。

★ 白面金毛九尾

騒動がある程度収まったようなので私はいつも通り散歩に出て適当に買い物でもするつもりで外へと出た。

日課と言うには少々贅沢で自堕落だが今現在の私には他にすることもないのだから仕方がない。ちなみに私が毎月貰っているお小遣いの額は一般的なサラリーマンが聞いたら怒り出してしまうような金額なのは内緒だ。実際、本部が壊滅したと言ってもリバースの預金はまだまだあるようだし。

そういう訳で私は普段愛用している公園に入り屋台で販売していたクレープを購入して口に運ぶ。世の女性の例に反する事無く私も

甘い物は大好きだ。特にこのクレープという物は絶品でこれがないと一日が始まらないくらいには愛着を持っている。

ところでこのクレープという物は世の女性に対しては天敵の代名詞を持っているらしい。大して容量もなくせに値段が高く、しかも高カロリー！こんな物を好んで食べ続けるなら聞くところによるダイエットなど無意味にする一品と言っても過言ではない。

「・・・」

まあ私には関係ないけど。

人外だから、と言う理屈ではない。人外と言っても私は狐の化身であって普通に食べ過ぎれば太る事もありえる。私に関係がないのは単純に私が『食べても太らない体質』だからだ。

ちなみにこの事をリバースに話したらテンペストには絶対に内緒にするように釘を刺された。ああ見えて彼女は意外に影では苦労しているらしい。お気の毒様。

そんな世の女性が殺意を抱きかねない体質の私はさっさと件のクレープを食べ終わり食後のお茶を求めて自販機の前に立ち、いつもの事なので迷う事無く好みのお茶を選択しながら自分で自分の行動に苦笑する。

私も随分俗世にまみれた物だと思う。

以前の野良狐暮らしをしていた頃には今の生活など想像も出来なかったが今からすれば以前の生活の方が想像出来なくなってきている。私も順応性も存外捨てた物ではないらしい。

「ふう〜」

いつも確保している公園のベンチに座り余り美味しいと言えない缶のお茶を飲み終えて一息つく。まあ甘い物を食べた後味を消化するのが目的なので余り贅沢は言えない。

「・・・」

私の暮らしそのものが贅沢の塊で今更の話だが。

座りながら私は飲み終えたばかりのお茶の缶をベンチから少し離れている空き缶入れへと向かって放り投げる。これもいつもの事な

ので放り投げた空き缶は狙い変わらずカランと音を立ててカゴの中に吸い込まれる。

本当。自分で言うのもなんだが毒されているなあ。

そうは思いつつも良い日和の中、日向ぼっこよろしくボンヤリと過ごす。これで隣にリバーでも居ればノンビリ世間話に花が咲いているところだ。

そんな私の平和ボケしすぎた思考は――。

「！」

背後から口を押さえつけられて驚愕に変わる！

誰！？リバーじゃない。彼の匂いも気配も記憶しているが今、私を背後から押さえつけている者は私の記憶にあるリバーと一致する物ではなかった。

私は自分が稀代の人外であり、人外の力を持っているにも拘らず恐怖にパニックを起こしかけ――。

「静かに。俺だ。分かるな？」

「！」

その声に1秒、2秒、3秒経ってからやっと思い当たる。

「良いな？ 離すぞ」

そして私を拘束していた彼の手がそっと離されてから――。

「・・・アクセ」

彼の名を――私の恋人だった人の名前を呟く。

「良かった。やっと会いに来れた」

「どうして？」

素直に疑問を呟いてから自分が如何に間抜けな事を言っているのかに気付く。どうして彼が私に会いに来れたのかなんて考えるまでもない。本部が壊滅したからだ。

「事情は後で説明する。兎に角、一緒に来てくれ」

「え？」

突然の事に私は戸惑う。戸惑い混乱する。

「迎えに来るのが遅れたのはすまない。だが、もう大丈夫だ」

「で、でも私は・・・」

「俺は何も気にしていない。さあ一緒に行こう」

「・・・」

伸ばされた手に私は迷う。この手を掴むべきなのか、それとも――。

「どうした？」

「私は・・・」

私は――どうすれば良いのだろうか？

今の生活に未練があるのかと言われれば、ある――と思う。退屈を絵に描いたような生活だが私はそれなりに気に入っていたしリバースの事も――嫌いじゃない。

「玉藻」

「・・・」

「玉藻！」

「私は・・・」

伸ばされたアクセの手を見つめ、私の今現在の環境を考え、それでもやはり答えが出ない。私は一体どうすれば――。

「あいつに何かされたのか？」

「え？」

「あいつが・・・リバースが原因なのだな？」

「そ、それは」

「良いだろう」

私に伸ばしていた手を戻しアクセは決意の表情で私を見つめる。

「俺はあいつと決着をつける。そして君にどちらが相応しいのか証明してみせる」

「証明？」

「そうだ。あいつと俺のどちらが優れているのか君が判定を下すんだ」

私がリバースかアクセのどちらかを選ぶ？

それはつまり選択肢は彼らではなく私にあるという事？

「良いの？」

「ああ。明日またこの時間にこの場所で」

「・・・分かった」

私はアクセの言葉に頷き――了承した。

翌日。

昨日と同じようにセシリアが暴走しかけたけれど私は無事にリバースを散歩へと誘い公園に連れ出す事に成功した。

「ちょっと飲み物を買ってくるね。リバースは何が良い？」

「ん。それじゃいつもの」

そしてリバースをベンチに残して私は自販機へと離れる。リバースが自販機で買う物といえばお茶か珈琲だ。どちらが良いという判断は特に無く、どちらを買っていても正解らしい。

私は今日の気分でお茶を選択しつつ横目でリバースの様子を伺う。

「・・・」

そろそろ時間の筈だ。

私が公園の時計で時間を確認してから視線をリバースの方へと戻すとリバースがギョツとして慌ててベンチから飛びのくところだった。

直後に今までリバースが座っていたベンチが粉々に破壊されて吹き飛ばす！恐らく直前にテンペストの警告が入り慌てて回避したのだろう。

「ちょっと待て！行き成りにも程が・・・く！」

続く第二撃も転がるように横っ飛びに飛んでギリギリで回避する。

「ち！」

その時点で確実に自分が狙われている事に気付いたのかベンチの背後にあった草むらへと慌てて飛び込んだ。

直後、2発、3発と攻撃が繰り返されリバースが飛び込んだあたりの草が飛び散る。

その時点でやっと拳銃を構えたアクセが姿を現した。

「出て来い」

「やっぱりお前か。今更何の用だよ？」

草むらに隠れたままアクセに受け答えするリバーズ。正直ちよつと格好悪いがなんともリバーズらしいと思っってしまった。

「預けていたものを返して貰いに来た」

「は！本部が壊滅したから玉藻を迎えに来たって？今更にも程があるな！」

「黙れ。貴様を殺して玉藻を納得する形で迎える。玉藻も了承済みだ」

「・・・」

不意に草むらの中からリバーズの視線を感じた気がして思わず目を逸らしていた。

「相変わらずだな、お前は」

「やっと出てくる気になったか」

アクセの言葉通り草むらから立ち上がったリバーズが姿を現し、両手を広げてアクセを迎え撃つ体勢で向かい合う。

「『^{リバーズ}反転結界^{コア}』か。舐められたものだな」

「！」

拳銃による加速攻撃の迎撃に対する手段はあっさりとアクセに看破されてしまう。そうなると残る手段は――。

「貴様の能力は聞いている。俺の東位置には立たせん」

拳銃を放り投げナイフのような物を取り出しながらアクセはリバーズの行動を封じて立ち塞がる。『^{リバーズ}反転結界^{コア}』『^{リバーズ}反転滑走^{エア}』を封じられてはリバーズに反撃の手段はない。

「そんなナイフが俺に通じると思っているのか？」

「ただのナイフだと思うか？」

アクセがナイフの柄の部分に付けられた紐を引くとナイフの周辺部分が小刻みな音を立てて回転する。丁度チェーンソーのような感じにギザギザの部分が回転しているのだが動力源が見当たらない。

「能力で回転の加速を補助して動力部分を削除したお前専用の武器

か。本部にあつらえた貰った遺品と言う奴か？」

「貴様の『^{リバース}反転結界』には弱点がある。確かにあらゆる攻撃に対して反射が可能だが連続反射回数^{コア}の区切りには僅かに間隔がある。サブマシンガン程度なら跳ね返せるだろうが高速で回転する刃を防ぐ事は出来ない」

「！」

私とリバースは同時に息を飲む。アクセの言葉を信じるならば高速で回転するあのギザギザの1つや2つならリバースは防げるが全てを防ぐ事は不可能だと言われたのだ。

「参ったね、こりゃ」

リバースは困った顔をしながら服の中から鎖の鞭を引きずり出す。『^{リバース}反転凶刃』か。それで俺のナイフを捻じ切る心積もりだろうが、どちらが早いかな？」

アクセのあの自信から考えればナイフを捻じ切るよりも鎖が切断される方が間違いなく早いのだろう。

このままいけば間違いなくリバースはアクセに殺される。殺される——筈だ。けど本当にそうだろうか？『あのリバースが』がこの事態を全く予想していなかったとは私には思えない。窮地を演じて逆転の策を待つ。リバースの常套手段が私の頭から離れなかった。

「死ぬ」

冷たい声と共にアクセが強烈な踏み込みでリバースに斬りかかる！

「く！」

リバースは苦悶の声と同時に後退してギリギリでナイフを鎖で受け止め——。

「痛っ！」

アクセの宣言通り鎖が容易く切断されてリバースの腕を浅く切り刻む。

「次は外さん」

そして間髪入れずに次に攻撃に移るアクセ。リバースの表情に余裕はなく、笑みはなく——まさか策はない？

「ぐう！」

そう思った瞬間、苦悶の声が私に届く。苦悶の声を上げた主は――アクセ！

やはり策はあったのだ！

私はそう思い直して――。

「？」

二人――リバースとアクセの視線が私に向いている事に気付いた。何故私を見ているの？正確には二人が見ているのは私ではなく――私の指先。

「え？」

いつの間にか振り上げられていた右手。そして青い硝煙が立ち上がる指先。この現象は知っていた。

「ど、どういふつもりだ？」

アクセが『私に』向かって問いたです。

『私が』『アクセに向けて』『狐火を放った事』に対して。

「あ」

私は自分の行動に全く自覚を持っていなかった。どうして私はアクセに向けて攻撃を仕掛けてしまったのか？まるでリバースを助けるかのように。

「貴様！玉藻に何をした！」

アクセがリバースを糾弾する。まるで今の私の行動がリバースのせいだと言うように。

私はリバースに操られていた？

「それ。何処まで本気で言っている訳？」

勿論そんな訳がない。

「ふざけるな！玉藻が俺に攻撃を仕掛ける理由など貴様が原因でなくて他に何がある！」

「本気で分からないのか？それとも分からないふりをしているだけか？」

「！」

ギリっとアクセが噛み砕けんばかりに歯を食いしばる。対するリバーは傷を受けた腕を押さえながらアクセから一步距離を取る。「こ、こんな物は何かの間違いだ！きつと貴様にトドメを刺す一撃の狙いがそれただけだ」

「だったら、もう一度やってみるか？」

「！」

リバーの言葉に明らかにアクセが怯んだ。そしてその原因に私はやっと気付いた。

青い硝煙を上げる私の指先。

先程からずっとその指先が――アクセを指していた。

「ああ。そういう事なの」

やっと私は理解――否、自覚する。

「玉藻、何かの間違いだと言ってくれ！こんな、こんな事は何かの間違いだと！」

「ごめんなさい。アクセ」

私は歩みを止めながらアクセに謝罪する。そして、その位置に――リバーを後ろに庇いアクセと正面から対峙する位置へと立つ。

「私は貴方とは行けない」

「やめてくれ」

「だって私は・・・」

「やめてくれ！」

「リバーを愛しているから」

言葉と同時に私は狐火をアクセに向かって放つ。アクセはその炎を避ける事もせずその身に受け――それでも倒れる事無く立ち続けた。

「貴方がリバーを殺すと言うなら私が貴方を殺します」

「・・・」

そして彼は無言のまま私の前から立ち去った。



「一つ聞きたいんだけど」

「ん？」

アクセが立ち去り公園からの帰り道。隣を歩く玉藻が尋ねてきた。
「これも作戦だったの？　こうなると分かっていたの？」

「どうかな」

答えをはぐらかしたが玉藻の疑念は半分当たりで半分外れだ。確かに俺は今回の事に対して策を練った。『何の対策も討たない』と言う策を。

確かに俺はこうなる事を『信じていた』訳だが『確信』はしていなかった。玉藻の今生を生きた年月の短さ故か、それとも前世から引き継いだ名残なのか。玉藻は自分の感情に対して恐ろしく鈍い。その感情を自分で気付かせる為に俺はアクセの襲撃を予想しながらも何の対策も立てずに受け入れる事を決めた。

必要だったのは玉藻が自分で気付く事。そして恐らく――。

「あ、あの・・・」

「ん？」

「う、腕。組んでも良いかな？」

もう二度と迷う事はないだろう。

「今更聞くなよ、そんな事」

「う、うん♪」

幸せそうに腕に寄り添ってくる玉藻が掴んでいる腕は先程アクセに斬り付けられた方の腕なのだが、とてもそんな無粋な事を言える空気ではなかったので痛いのは我慢した。

第三章

「流石にそろそろ不味いか」

「その台詞、前にも聞いたわ」

「いや今度は本当に本気だって。セシリアも我慢はしているけど爆発寸前っぽいし」

「誰かさんが玉藻とイチャイチャしているからじゃない」

「毎回思うけど本当覗き見好きだよなあ、お前」

「見たくて見ている訳じゃないわよ!」

まあ、そりゃそうだ。

テンペストだって俺が他の女とイチャついているのを好き好んで見たいと思っている訳ではないだろう。

「純粹に俺の事が気になるから見てるだけだもんなあ」

「わ、悪い!？」

「いや。悪くないけど」

流石にテンペストも危機意識が強くなっているのか開きなおってきた。



「兎に角、遊んでる時間も惜しいし今日から行く事にするわ」

「この手だけは使いたくなかったわね」

「全く持って」

俺は部屋の箆笥の奥に仕舞われていた服に着替えてテンペストと一緒に嘆息する。何を隠そう俺が着替えたのはとある学園の制服なのだ。俺はその服に着替えてから眼鏡をかけ――。

「それじゃ行って来るよ」

「いってらっしゃい」

女へと反転してから出かける事にした。

アタシが行く目的地は格好からも分かるとおり学園だ。無論、今更学校へ行って授業を受けようなんて殊勝で呑気な事を考えた訳ではなく学園でしか会えない人物へと面会する為に仕方なく登校した訳だ。

「・・・」

と言いつつ何故か真面目に授業に参加しているアタシが居る。

「失敗した。会うだけなら放課後にでも来れば良かったじゃない」

『彼女の予定が分からない以上早めに予約を取り付ける必要があったのでしょう？』

「そうだけどさ。授業まで受ける必要無かったじゃん」

『暇なんだから良いじゃない。昼寝でもして寝過ごしたんじゃない先方に怒られるわよ』

「はあ」

結局テンペストに諭されて真面目に授業を受ける羽目になってしまった。

待ちに待った放課後。

本気で待ち遠しく思ったのも久しぶりな放課後にアタシは学園の生徒会室へと足を運ぶ事にした。

「邪魔するよ」

「いらっしゃい」

ノックもせずに扉を開けたアタシに動揺する事もなく当然のように対応してくれる彼女。事前に約束を取り付けてあった事もそうだが彼女の『耳』がアタシの接近を捕らえていた為だ。

「それで唐突に学園に来て一体何の御用でしょう？」

彼女――ゴールドがアタシの目的について単刀直入に切り込んできた。

「なんだと思う？」

対してアタシは答えをはぐらかす。

「最初に連絡を受けた時は私の腕輪に関する話かと思いましたが、

どちらかと言えば貴方個人のお話のような雰囲気ね」

「まあ確かに個人的な相談なのは間違いないかな」

「それはつまり私の財力または情報力を当てにしての相談と思って良いのかしら？」

「そういう事になるかな？」

ゴールドが本気でお嬢だというのは聞いていたので、そのツテでアタシの後ろ盾を探して貰う心積もりだった。

「ならギブ& amp; テイクにしませんか？丁度私一人では手に余る案件があったところです。これを手伝っていただけるなら貴方の働きに応じて報酬と言う形でお手伝いさせて貰うというのは？」

「良いのかい？アタシの頼み、結構無茶な部類に入るけど」

「その時は私のお手伝いを追加か、もしくは貸しにするだけです」
「良いね。そういうの嫌いじゃないよ、アタシは」

「だと思いました。それで件の案件の話なのですが・・・」
話を切り出すゴールド。その用件は――。

「へえ」

今のアタシにとって願ったりな物騒な用事だった。



「ここかい？」

深夜。アタシはゴールドの案内に従って古びた倉庫街の一角へと来ていた。

「ええ。情報ではここに間違いないし中からの音を拾った限りでも予想に違わないようです」

「数は？」

「11・・・いえ12人ですね。Lv1仕様の腕輪では範囲ギリギリなのですが間違いないでしょう」

「了解」

今回ゴールドに依頼された仕事は能力者残党の排除だ。アタシは

気にもしていなかったが本部が壊滅しても全ての能力者が居なくなつた訳ではない。特に腕輪の能力者はゴールドと同じように健在で、寧ろ本部が壊滅と同時に闊歩しだした不貞の輩が居た訳だ。

「確認するが中の連中を『始末』して良いんだな？」

「ええ」

「既に知っていると思うが本部の方は壊滅状態で後処理は期待出来ない。そっちの方も含めて・・・良いんだな？」

「ええ。構いません」

ゴールドがアタシにこの依頼を持ちかけた理由はアタシの戦闘能力を期待してのものだと言う事は分かる。分からないのは彼女が何故能力者達を排除しようと思ひ立ったのか。その原因だ。

「行ってくる」

「御武運を」

だが、それは今尋ねなくてはいけない事ではない。アタシは正面から倉庫の扉を開け放ち迷う事無く中へと踏み込んだ。

倉庫の中は思ったよりも明るく環境が整えられていた。

「ゴロツキどもが随分小奇麗な所に住んでるじゃない」

アタシは挑発の意味を籠めて中に居た者達へと視線と声を向ける。

「何か用か？ここは俺達が正規の手順を経て借りた倉庫だ。無断で入って来ないで貰いたい」

アタシに対応する男には見覚えがなかった。が、その腕には腕輪が嵌められておりゴールドの情報に間違いがなかった事を証明している。

「あんたらみたいな未練たらしい情けない雑魚達に引導を渡しにきてやったよ。感謝しな！」

「はあ？俺達が誰なのか分かって言っているのか！」

「知っているよ。似非能力者ども」

「！」

アタシの言葉に倉庫内に動揺が漏れる。その際に数を確認するが

見える範囲で数えられるのは10名。2名足りない。

「逃げたか隠れたか席を外しているのか」

『勿論、貴方が入ってきた事に警戒して狙っているのよ』

「だろうね」

アタシはテンペストの返答に頷きながら目の前の10人に視線を戻す。

「リ、リバース」

さほど待つでもなく、その声は目の前の10名の内の誰かから発せられた。倉庫内に先程とは比べ物にならないほどの動揺が溢れ出した。

「名前が有名だと説明する手間が省けて助かるね」

「ま、待ってくれ！俺達は別にあんたと敵対する気は・・・ごぶ！」

「ひとゝつ」

言葉の途中で『リバース エッチ反転凶刃』で頭を吹き飛ばされた男はそのまま倒れて動かなくなる。

「く、くそ——！！」

破れかぶれでアタシに対して何かを『砲撃』しようとしてくる相手の集団に向けてアタシは持っていたコインを離す。その周囲に居た奴ら数人が『暴風』に千切れ飛ぶ！

「まとめていくつ飛んだ？」

『6つね』

「それじゃ7つ目と」

後5人。多少バラけて居るが問題にもならない。所詮徒党を組んで能力を誇示しようとする相手なんて雑魚に過ぎない。

『狙撃系能力者からの狙撃を4つ確認』

「了解」

アタシが確認の返事を返すと同時に周辺4つから悲鳴が聞こえてくる。アタシの『リバース コア反転結界』に弾丸となる物を跳ね返されて絶命した声だ。

「残り一つ」

「ま、まま、待ってくれ！俺達は何をしたって言うんだ！何で俺達が殺されなくちゃいけないんだ！」

「そんな事、知る物か」

「え？」

アタシの返答に呆氣に取られた声を上げる最後の男。どうでも良いけど男ばかり12人もよく集めたものだ。華がない。

「それとも何かい？あんたらは人を殺す時、相手も自分も納得出来る理由を用意して殺してきたのかい？」

「そ、それは・・・」

「だったらグダグダ言わず死にな！」

「ひぎ！」

最後の一人を『リバーズ エッジ反転凶刃』で捻り殺して依頼を完了した。

「相変わらず容赦のない人ですね」

「して欲しかったのかい？容赦って奴を」

「いいえ。そんな貴方にだからこそ依頼を要請したのです。ご苦労様でした」

色々理屈を捏ねているが人を殺す事に対して『ありがとう』と礼を言わない所が実は結構気に入っていたのだと気付く。

「あんたって存外常識的な奴だったんだね」

「私に対してどんな評価を持っているのか知りませんが多分私も貴方に対して同じような評価を持っていると思いますよ」

「そうかい」

『貴方はまだまともだ』と言われた気がして少しだけ――内心でちょっとだけ氣を楽にするアタシがいる事に驚いた。まだアタシにこんなまともな部分が残っていた事に。

「それで、こいつらを始末しなけりやならなかった理由は？」

「それを事後に尋ねますか」

「事前に聞いたら殺す氣が鈍るかもしれないじゃないか」

「ふう。理由・・・話さなければいけませんか？」

「聞かない事も仕事の内だと言うなら質問を取り下げるよ」

「・・・」

ゴールドは僅かに嘆息すると決心がついたのかポツポツと話し始める。

「平たく言えば私が彼らを許す事が出来なかったのが理由です」

「こいつら、あんたに何かしたのかい？」

「いいえ。彼らが私に直接何かをした訳ではありません。ただ私は彼らの存在その物を許す事が出来なかった」

「能力者を？」

「能力者かそうでないかは些細な問題です。ただ能力を得た彼らの行動と、その行動を許してしまう人間性が許せなかった」

「それって要するに・・・」

ゴールドの行動、それを端的に表す言葉をアタシは知っていた。

「正義の為？」

「人を殺す事に躊躇を持たない人間が語るには過ぎた言葉です。私はただの人殺しで結構です。貴方と同じように」

「・・・」

少しだけゴールドの苦悩が分かった気がした。彼女はある意味恵まれすぎていて、その分自分に罪悪感があるのだ。だから常に『自分は何かをしなくてはいけない』と言う思いがあるのだろう。

「良いじゃないか」

「え？」

「弱さを自覚した人間が自分を誤魔化す為に正義を名乗るなんてよくある話だ。あんたも気張ってばかりいないで気軽に正義を名乗りな。少なくともあんたが名乗る分にはアタシがフォローしてやるよ」

「ふふ」

ゴールドはアタシの言葉に少しだけ笑って首を横に振った。

「私は貴方が考えるよりもっと臆病なのです。もし正義を名乗ってそれを論破された時、立ち直る自信が無い」

「本当。あんたみたいなまともな人間が能力者だと苦労するね」

「お互い様に」

アタシも苦笑して、これ以上の話を切り上げた。これ以上の話は傷口を広げるだけだとお互い分かっていたから。



「さて。無事依頼も完遂された事ですし貴方の報酬の話をしましう」

「・・・」

倉庫街から場所を移してゴールドの自宅へと来た訳なのだが――。

「金ってある所にはある物なんだな」

「どういう意味でしょう？」

「いや。そのまんまの意味だけど。お嬢だとは思っていたけど、ここまででかい屋敷に住んでいるとは思わなかった」

「貴方、一度私を冷やかしに来なかったかしら？」

「いや、あの時は黒服とかメイドとかに追いかけてそれどころじゃなかったし」

外から見るとの中に入るのではやはりレベルが違う。

「それで報酬の件ですが・・・」

「ああ、うん。要するに今日みたいな仕事を回して欲しいんだ」

「どういう意味で？」

「ちょっとした事情でね。今日みたいな仕事をこなさないと身が持たない事態になってる」

セシリアの話は勿論だがゴールドに対して人外の話をするつもりはなかった。恐らくゴールドにとって人外は排除するべき敵ではないし、そうであるなら知らなくても良い事だから。

「お金ではないですよ。とすると理由は分かりませんが貴方は今日のような物騒な仕事をこなさないといけない環境にいる？」

「まあね。ちょっとヘマをして毎日がスリリングな死と隣り合わせな生活を満喫する羽目になっちゃった」

「ふん」

俺がわざと原因をばかして話している事に気付いたのだろう。ゴールドは深く聞いてこなかった。ありがたい。

「お嬢様。お茶が入りました」

「ありがとうございます」

そこにノックがされてメイドが入ってくる。俺の知っている物騒な剣術メイドだった。

「・・・」

メイドは俺に一瞥くれると――そのまま部屋を去っていった。

「怖え」

「別に彼女の記憶は戻っていないし、そもそも貴方と敵対するような子でもないわ」

「そういう意味じゃないんだけど」

ゴールドの家に来る際、俺は既に男に戻っていた。だからさっきの視線はゴールドが男を連れ込んだ事に対するぶしつけな視線だった。

「それでさっきの話だけど・・・ん？」

俺は先程の話の続きを促そうとすると眼鏡にテンペストから連絡が入った。

「どうした？」

『き、緊急事態です！今、今そちらに・・・』

「落ち着けよ。支離滅裂で何が言いたいのかさっぱりだぞ」

テンペストはよほど慌てているのか普段の簡潔な文章とは裏腹に興味旨が伝わってこない。

『で、ですから！今そちらに向かって・・・』

「向かって？」

何が向かっていると言うんだ？

★ 金の耳

「あら？」

リバースが眼鏡と支離滅裂なやり取りを始めて幾許もしない内に外からのちょっとした物音を聞き分けた。何か小さな物が庭に侵入してきたらしいのだが――。

コンコンと丁度この部屋の表に來ると小さな音で窓を叩く音がした。私でなかったら聞き逃していたかもしれないほど小さな音で。

リバースは連絡中で眼鏡相手にボソボソ会話中なので私は少しだけ席を立てて窓を開いて外を確認してみる事にした。

「まあ」

窓を開けるとひょっこり顔を出したのは小さな――本当に小さな狐のようだった。

「何処から來たのかしら？」

私も色々あったが結局のところ女の子と言っても良い年齢だ。こんな小さくて可愛い小動物には心が和まされる。

「おいで」

だから、そっと子狐に手を伸ばすと子狐は私の手の上にチョンと飛び乗り――それを迷う事無く踏み台にして部屋の中へと入ってきた。

「あ。ちょっと」

少しだけ慌てて私は振り返り子狐の後を追いかけると子狐はまるで迷う事無く連絡中のリバースの元へと駆け寄り――。

「お？」

肘、肩と経由して頭に飛び移りダラーンとリラックスした感じで寝そべった。

「玉藻？」

「知っている子？」

「ああ。一応俺の、なんだ、あれだ」

語尾があやふやになってしまったがリバースの飼い狐だったらしい。私を無視してリバースの元へ一直線に向かうとは相当彼に懐いているらしい。

「何だ。向かってきているのって玉藻だったのか。確かにこんな夜中に出歩くのは危ないけど、そこまで慌てる事じゃ・・・え？」

眼鏡と更に会話を続けたリバーズはその時点で凍りついた。

「どうし・・・痛っ！」

尋ねかけた私は耳を押さえて蹲る。何か妙に甲高い音を発する物が庭に侵入してきたらしく、その甲高い音を私の耳が捉えて頭がガンガンする。

「な、何が一体・・・」

耳がおかしくなりそうなので私は能力を解除してから窓の外を眺めるべく窓際に近寄って――先程閉め忘れていた窓から何かが飛び込んできた。黒い鳥のような物体。一瞬カラスかと思ったが飛び込んできたのは小さな蝙蝠のようだった。

それを見て私は自分の耳鳴りの理由を納得する。蝙蝠は独自の超音波を発する動物なので私の耳がその本来なら聞き取れないほどの音波を感知して強烈なダメージとなってしまうたのだろう。正直、蝙蝠は苦手だ。

子狐なら兎も角、蝙蝠まで家に上げる理由はないので、さっさと追い払おうと手を伸ばした私の目の前で――。

「うげ！」

リバーズの不穏当な発音と共に――。

「見つけた♪」

蝙蝠が一人の女性へと姿を変えていた。

「セ、セシリア!？」

「ねえ。ストックは？」

呆然とする私を置き去りにして、その女性はリバーズにしな垂れかかるような質問をした。ストック？

「ストックは補充出来たのでしょうか？ねえ、いくつ溜まったの？」

「だから待て！折角確保したストックを行き成り消費する訳には・・・」

「でも補充は出来たんだ」

「あ」

よほど慌てていたのかリバースはリバースらしからぬ誘導尋問に引っかかって顔を青ざめる。

「良かった」

そして女性はホッとしてリバースの首に腕を絡めると――。

「愛しているわ。リバース」

迷う事無く口付けた。

「な!？」

リバースの――首筋に!

「あ!が・・・ぐ!」

何事かと混乱する私の前でリバースが突如苦しみ始める。そして苦しむリバースの元からミシミシと意味不明な音が響いてくる。何の音かと発信源を探れば――それは抱きすくめられたリバースの骨が軋んでいる音だった。

決して大柄ではないとは言え男性のリバースを華奢な女性の力で骨まで軋ませている事実は驚愕したが、その驚愕は次の驚きでかき消される事になる。

リバースの顔色が見る見るうちに蒼白になっていったからだ。

何が起こっているのか確認しようとした私は女性がリバースの首筋に口付けているだけではない事に気付いた。彼女はリバースの首筋に――その長い犬歯を付きたてて彼の血を吸い上げていた。

「き、吸血鬼」

私とその単語を思い浮かべた時、既にリバースの顔に気は無く、それと同時に――。

「ぎ・・・が!」

表現出来そうもない音を立ててリバースの背骨が抱き砕かれていた。

★

貴重なストックが早速一つ消費されてしまった。

「はぁ。何回やってもこれだけは慣れないな」

「え？」

満足そうに口元に残った俺の血をペロリと舐め上げているセシリアとは裏腹に俺が隣に現れた事でゴールドは大層驚いていた。まあ、それはそうだろう。

「リ、リバーズ？だって今、死んで・・・」

「説明すると長いんだが・・・」

仕方なく説明を開始しようとする俺に――。

「おかわり♪」

いつの間にか正面に回りこんできたセシリアが抱きついて再度俺の首筋に牙を――。

「いい加減にしない！」

「きゃん！」

突き立てる直前に玉藻にしばかれて頭を抱えて蹲る。

「人が黙って見ているからといって余り調子に乗らないでください」

「痛い」。暴力狐が殴った」

「黙りなさい。怪力吸血鬼」

涙目で俺に頬を擦り付けて甘えてくるセシリアに反対側から俺をぐいぐい引っ張って自分の下へと導こうとする玉藻。

「・・・」

なんだかもう一回くらい死にそうだ。

第三章（後書き）

まさか新年早々更新することになるとは・・・。

第四章

結果として俺は粗方の事情をゴールドに説明する事になってしまったのだが――。

「なるほど。それなら確かに貴方は定期的に人の命を奪う必要がありますね」

そう言って頷き自分の思考に没頭し始めた。

「これはある意味都合が良いかもしれないわね。目的は違えど私と貴方は利害を一致させる事が出来るわ」

「利害って、お前まだ今日みたいな事を続ける気か？」

「今までは私個人で処理出来ない問題が多かったけれど貴方が協力してくれるならば色々可能になるわ」

「物好きな事だ」

この辺りに恐らくゴールドの根源、もしくは暗部に触れる何かがあるのだろうが俺はそれに対して積極的に触れようとは思わなかった。既に俺の方は俺の方で手一杯なので彼女の方まで背負い込みたくない。

「しかし協力すると言っても今日みたいな事を定期的に続けるとなると個人では色々不都合が出てくるぞ。主に死体処理の方がな」

「それは確かにそうね。今日みたいな単一的な事情なら兎も角、定期的に繰り返す事になれば手もお金も足りなくなる」

ゴールドも死体処理の面倒さは実感として理解しているようだった。

「それなら・・・個人で駄目だと言うなら組織を作り上げてしまおうと言うのはどうかしら？本部のような大掛かりな物ではなく私個人が経営すると言う形の組織を」

「ふむ」

以前セシリアが立案したセカンドプランに似た意見だが今回ゴールドが提案する組織はセシリアの物とは大きく違う点がある。ゴ―

ルドとは利害が一致し設立に手を貸すにしても俺は『所属する』という立場になる事だ。本部に居た頃のように仕事を選べるほどには自由はないだろうが『管理者』という立場に立たされる事はない。

「悪くないな。けど実際問題としてそれは可能な事なのか？」

「1から人員を集めるのなら難しいでしょうが、この街には本部に所属していた元職員が大量に存在しますわ。職にあぶれた彼らを私が雇用すると言う形にすればそれほど難しくはない筈よ」

「人員の方はそれで良いとして資金面は？」

「それは・・・私のポケットマネーだけでは少し心許ないかも知れませんね。貴方の方の今の資産はいかほどかしら？」

「俺？」

そう言えば俺の預金って今いくら位なんだろう？本部に勤務するようになってから仕事の度に振り込まれていたのだが一定額――つまり使い切れなくなった時点で確認するのを止めてしまっていた。

「テンペスト。俺の予算ってどのくらい？」

『ちょっと待って。私も確認していなかったから調べてみるわ』

どうやらテンペストも俺と同じだったらしく急遽俺達の予算額の調査をする事になった。

『えっと・・・』

暫くしてからテンペストはバツの悪そうな感じで俺に金額を伝えてくれた。伝えてくれたのだが――。

「マジ？」

『ええ。私も何度か確認してみたのだけど間違いないみたい』

「で。おいくらだったの？」

呆然とする俺を見据えてゴールドが尋ねてくる。

「えっと。6億ちょいくらい」

「ぶ！」

何故かその場に居てゴールドのお茶の世話をしていたメイド――バイブルだけが噴き出す。どうやらこの面子では彼女だけがまともな感性の持ち主らしい。

「ふむ。私のポケットマネーと合わせれば20億くらいは確保出来ますわ。当面の資金はこれで何とかなるでしょう」

「・・・」

お嬢のポケットマネーって一般人とは次元が違うのか？

「組織立ち上げの為には貴方達の資金を一時的に借り受ける形になりますが、よろしいでしょうか？」

「え？ああ、別に良いけど」

元より使う当てどころか使い切れなくて放置されていた金だ。

「これで後は・・・」

ゴールドは粗方考えを纏めてから右腕――腕輪を装着された腕を掲げる。

「私の覚悟の問題ですわね」

「腕輪、外しておくか？」

「出来ますの？」

「多分」

元々腕輪はミタマを解明して作られた量産品だ。原型となったオリジナルであるミタマを干渉させる事が出来れば取り外す事は難しくないだろう。

「そうですか。でもその前に私の覚悟を表明しておきましょう」

「？」

「『ゴールドシィヤーズ黄金聴域』です」

「え？」

一瞬、ゴールドが何を言ったのか理解出来なかった。しかし直ぐにそれがゴールドの真名だという事に思い当たる。腕輪を着けたまま真名を明かすと言う事がどれほど危険な事なのか元腕輪を着けていた俺は良く知っている。流石に大した覚悟だと言わざるを得ない。「なるほどね。金髪だからじゃなくて、そういう意味でのゴールドだった訳か」

だから驚くのは一瞬。それ以降、俺は普通にゴールドの真名を受け入れた。

「さて。それじゃ腕輪を外すとするか」

「宜しく願います」

腕輪を着けたゴルドの腕を取り、腰の後ろに差したミタマを干涉させる形でそれを抜き取る。予想はしていたが難しい作業ではなかった。

「思ったよりも大掛かりな作業は不要なのですね」

「まあな。それよりどうだ？」

「予想はしていましたがやはり能力は使えなくなるのですね。今まで耳障りだった雑音も聞こえなくなると寂しい物です」

「ついでだからメイドの方の記憶も戻しておくか？」

「そうですね。こうなった以上もう忘れている意味はありませんし俺達の言葉に当惑するバイブルの額に掌を当てる感じで再度ミタマを干涉させる。能力者の記憶を奪うという作業は腕輪の波長に干涉する事で能力者自身に影響を与えと言う物だったので先程と同じ方法で記憶も戻る筈だ。

「てい！」

特に掛け声も動作も必要なかったが味気なかったのでついでにバイブルの額を掌で打ち付けると同時にパキンと乾いた音がしてバイブルに掛けられていた記憶の封印が解ける。

「あ」

呆氣に取られた声でバイブルが声をあげ――。

「は？・・・ほげ！」

額に当てていた手を捕まれて投げ飛ばされた！

「うつつ・・・行き成り何をする！」

「あ。つい」

「ついで済むか。ついで！」

この物騒メイドと思ったが流石に言葉にはしなかった。身体能力では俺を凌駕する彼女に正面から喧嘩を売りたいとは思わない。



ゴールドの『組織立ち上げ宣言』から数日。

俺は再度ゴールドに呼び出しを受けて彼女の部屋へと通される事になった。

「とりあえず人員の確保だけは粗方済ませました。死体処理班が20名、それと能力者と研究員を1名ずつ確保しました」

「能力者と研究員ってこいつら？」

通されたゴールドの部屋に居た二人に目を向けて嘆息する。よりによってエアーズと風切だった。

「エアーズは兎も角、よく風切の引き入れに成功したもんだ」

「ふん。能力研究の関係者の再就職口という奴が思いの外少なかっただけだ」

風切は相変わらず俺——と言うより能力者が嫌いなようだった。

「知識や技術は性格の問題では変質しませんから。能力者嫌いと言う点に目を瞑ってしまえば彼女は私達の組織にうってつけだわ」

「それは分かったが死体処理の方は当てがついたのか？」

「え？ 死体処理班を組織したんじゃないのですか？」

話題を変えた俺に疑問を挟んでくるエアーズ。

「お前は相変わらずだな」

「え？ え？」

「死体処理班と言っても、そいつらが死体を主食にするグルでもない限り死体そのものはどうにもならん。やつらの仕事は死体を現場から痕跡を残さず運び去る、言ってしまうえば回収班といったほうが正しい連中だ」

エアーズの疑問に答えたのは風切だった。流石に研究者なだけあってその辺りは詳しい。

「本部ではその辺りはどのように処理していたのかしら？」

「そこまでは知らん。少しは自分達で考えろ」

そっぽを向く風切に嘆息してゴールドは俺の方へと視線を向けて

意見を求めてきた。

「餅は餅屋だろうな。無理に死体をどうこうして処理しないでそれ専用の・・・そうだな、死体置き場のような場所へ管理者を買収して送りつけるのが良いんじゃないか？」

俺の意見に風切がチツと舌打ちする。恐らく知らないと言ったのは嘘で今俺が出した案を本部も取っていたに違いない。

「本部のような大掛かりな組織ではないからな。多分2、3箇所確保しておけば事足りる筈だ」

「分かりました。それでは今進めている買収工作を続行いたします」
当然と言えば当然だが俺の出す案は既にゴールドが実行中だった。俺達に意見を求めたのは確認のつもりだったのだろう。

「これで大よそですが組織の下積みは終わった事になりますが一つ大きな問題があります」

「ん？まだ何かあるのか？」

「はつきり言えば戦力が心許ありません。実質的に私やバイブルが前線に出られるようになる為には暫く時間が掛かりますから。そうすると現在の戦力と言えば貴方一人しかない事になってしまう」

一応ゴールド達には腕輪無しでも能力を行使出来るコツのような物は伝えたが一朝一夕で出来るほど簡単な物ではない。

「戦力になる能力者は集めなかったのか？」

「私の標的がなんなのかお忘れですか？」

「ああ。そっか」

ゴールドの目的はその『戦力になる能力者』がほぼ全て対象になる。そうである以上迂闊に前衛になれる能力者と接触を取る訳がないか。

「一応他の条件も加味して調査を試みたのですが勧誘出来た能力者は彼女一人でした」

「えっと。すみません」

俺達の視線を一身に受けて何故か謝るエアーズ。

「それで今日集まって貰ったのはここからが本題なのですが強力な

能力者と協力または同盟を結ぶ為の話し合いです」

「強力な能力者に知り合いなんているのか？」

「貴方に分かりやすく言うならば『ゴースト一派』でしょうか？」

「・・・」

「強力な能力者集団であり、尚且つ私とは利害も一致しそうな相手。まだ風切から話を聞いただけです。私としては前向きに検討したいと思っています」

「ゴーストか。なるほどね」

ゴールドの意見で俺は少しだけ納得した。

「調べはついているという事か。流石に優秀な情報網だな」

「？・・・何のお話ですか？」

「・・・おい」

納得した傍から俺は頭を抱える羽目になった。まさか本当に本気で偶然なのか？ いや偶然と言うよりは――。

「お前ほどの者が踊らされた訳か」

「ちょっとお待ちを」

俺の言葉の意味を察してゴールドが少し沈黙して思案に耽る。

「まさか」

「お前すらも手玉にとるとは予想よりも大物なのかもな」

「信じられない。履歴は勿論、個人情報に粗方調べ尽くした筈なのに」

「上には上って事だろうな」

「何の話だ？」

俺とゴールドの主旨を抜きにした会話に理解が走らなかったのか風切が不機嫌そうに俺達に疑問を挟む。

「単純な引き算の問題だ。ゴールドは組織を立ち上げる主要人物。

俺はゴーストと戦闘経験がある組織唯一の能力者。お前はゴーストの情報を握る研究員。今日ゴールドがこの場に俺達を集めたのはゴーストに対しての話し合いをする為だ。さて誰が余るのかな？」

「！」

風切は驚愕して『彼女』に視線を向けた。

「えっと。なんだか根拠の薄い推測で私の人権を蹂躪されているような気がするの、は気のせいでしょうか？」

彼女——エアーズが困ったようなオドオドした態度で縮こまる。

「根拠その1。まずお前がここにいるのは違和感がある。この場においてお前はゴーストとは無関係の筈だろ？ そのお前がここにいる理由は恐らくゴールドに対して何らかの干渉を行った。能力なのか話術なのかは知らないがな」

「そう言えば彼女がこの場に参加する時に何かを言われた気がするわ。余りにも自然な言動だったので違和感を覚えませんでした」

「そ、そんな横暴な」

涙目で俺達に訴えかけてくるエアーズ。その余りにも頼りない態度と小動物的な視線でゴールドと風切は俺に視線を向けてくる。俺の勘違いではないのかと思っている訳だ。

「根拠その2。以前俺がゴーストと対峙した時あいつは言った。『聞いていない』と。これは即ち本部の中に仲間が潜入していて、その諜報員から情報を受け取れる立場にあった事を意味する」

「そ、それが私だなんて証拠は何処にも・・・」

「あ」

エアーズの言葉の途中、ゴールドが彼女の言葉に違和感を見つけて声を上げる。

「根拠その3。本当に無知無実の奴は普通『証拠』なんて単語は出さない」

「・・・」

エアーズは俺の言葉に口をパクパクしてから——。

「いつ、気付いたの？」

今までの言動を脱ぎ捨てるように冷たい声で問いかけてきた。

「確信したのは以前に風切にゴーストが俺の情報を本部の端末から粗方抜き取っていったと聞いた時だ。いくらゴースト一派とはいえ本部のセキュリティを外部から突破するのは不自然すぎる。ならゴ

ーストの情報協力者は本部内に潜入していると思った」

「それだけで私を断定するには根拠が薄いわ」

「次に俺がミタマを奪った時の事を思い出した。あの時、ゴーストとの二戦目、あいつは俺を正確に追跡してきた。あの時点で俺の現在地を正確に知っていた奴はテンペストを除けば・・・」

「私だけって訳ね」

エアーズは嘆息して肩を竦めた。

「一応言い訳しておくけど、それらの根拠に関して私は無実だわ。あの馬鹿が先走ったり口を滑らせなければ私の痕跡なんて残らなかったもの。この場に出席したのも貴方達が私達に関係のありそうな話し合いの場が設けられると知ったからで、もう少し話を聞いて必要と感じれば自分から正体を晒すつもりだったわ」

「なるほどね」

俺はエアーズを見据えながら眼鏡をグイと引き上げる。

「それで？」

「何かしら？」

「ゴールドはお前ら一派と共同戦線を張りたいらしいが、その辺りはどうなんだ？」

「そうね。確かに利害はそれなりに一致するでしょうけど共闘すると言うなら色々不都合が多いわ」

「例えば？」

「まず事は私個人のレベルで決定出来るほど単純ではない事。次に神剣の問題から来る本部との対立公式などね。貴方達が本部の関係者だったと言う事実は言い訳出来ない筈よね？」

「そりゃそうだ。しかも俺は本部やお前らからミタマを横取りしている訳だしな」

俺は笑いながら腰の後ろに差さっているミタマを撫でる。

「よく事情が飲み込めませんがリバーズがその神剣と言う物を返却すれば少しは問題が緩和出来るのかしら？」

流石にミタマの事までは話して居なかったのでゴールドが的外れ

な意見を提示してきた。

「絶対お断りだ」

「不可能ですね。今更神剣を返還されたところで既に正規の契約を結ばれた上に懐柔されたとなっては意味はありません」

だから俺とエアーズの反応は当然と言えば当然だった。

「問題の本質を見誤っているのかしら？ どうも主旨が理解出来ません」

「そもそも俺はあのゴーストと相性悪そうだしな。同盟の話はまずあいつを何とかしないと話にならないだろ」

「ああ。それなら問題ないでしょう。彼は既に私達『一族』から追放処分を受けています」

「何？」

単にゴルドの意識を逸らそうと思って出した話題にエアーズの切り返しを受けて驚いた。

「そもその話、神剣を奪われた時点で追放処分であった所を特別に奪回を許可されていたのです。それを焦って失敗した挙句、逃げ帰ってくるような輩では救いようがありません」

「厳しいねえ。奪われたって言うっても、その時はあいつまだ子供だったんじゃないのか？」

能力者の研究は7年以上前から行われていた筈で、その頃にはまだゴーストも幼少の身だった筈だ。

「関係ありません。神剣の契約者となったからにはそれを命懸けで護る義務があるのですから。神剣を奪われた時点で彼は神剣の所持者失格だったのに・・・」

「ふむ」

ゴーストに対するエアーズの愚痴を聞きながらふと思う。ひょっとしてエアーズとゴーストは個人的な付き合いがあったのかもしれない。本当に嫌っているなら愚痴など出ないだろうし。

「話を戻しますが貴方達との共闘は難しいと言う事ですか？」

「本来ならね。でも今私達一族の上の方から少し気になる意見が出

ているの」

「どのような？」

「能力者リバーズについて」

「俺？」

不意に一同の視線が俺に集中する。

「以前までのリバーズなら兎も角、今の彼は神剣の正規の契約者だわ。一族の出身ではないとはいえ正規の契約者を敵に回すのは避けたいという意見。恐らく神剣を奪回したとしても次の契約者を期待出来ない」と報告した事も関係あるのでしょうね」

「それはつまり貴方達の一族はリバーズを迎え入れようとしている？」

「可能性の話よ。彼を一族の本拠地へ招き入れて選定しようと言う意見が出ていると言うだけの話だもん」

「十分だわ」

ゴールドは俺の意見など何処吹く風で勝手に話を進めている。どうでも良いけど分かっているのかね？俺がどんな奴かという事を。

「さてと。そろそろ時間かな？」

「時間？何か用事でもあったのかしら？」

タイムリミットを告げるとゴールドから疑問の声が掛かる。

「エアーズの一件といい少し実戦から遠ざかりすぎて鈍ったんじゃないか？」

「む。探查系の能力を失っている以上、多少の状況把握の遅れは致し方ないではありませんか」

「能力は関係ない。周囲の言動から先を予測する力が鈍っていると聞いたんだ。本戦のお前はもっと周りの発言に対して敏感だったぞ」

「周りの発言？」

ゴールドは俺の言葉に今までの会話を吟味して思考に入る。その場にいたエアーズ、風切も同様に俺の言葉の意味を考え始めた。風切は兎も角エアーズもか。

「ヒントその1。エアーズの正体を見破った俺達は一族という組織の存在に触れた」

「それが何か？別に一族は起きてもいない脅威に対して動いたりはしませんよ」

「当事者だけあって先入観が邪魔をしたか。もう少し客観的な視線で物事を考えられるようにならないと優秀とは認めてやれないな」

「当事者？私が？」

「おい。私はなんだか嫌な予感がしてきたんだが」
意外な事に最初に気付いたのは能力者でもない風切だった。

「一族とやらに關係するエアーズが当事者で、しかし一族『は』この場に介入してこないのだろう？この都合の良い条件をクリアして時間と言う事は・・・」

「相も変わらず口の回る男だ。消えろ」

風切の言葉を遮るように響いた言葉と同時に俺は意味を消されてその場から消失した。

『な！？』

ゴールド、そして風切から驚愕が漏れる。

「これで邪魔者は居なくなった。神劍の奪回も完了だ」

「ま、まさか本気でゴーストが・・・」

「ユーリ。貴方今更何のつもりなの！」

ユーリ。それがゴーストの本名だったのかエアーズは落ちた神劍に下へと歩み続ける彼へ向けて糾弾する。

「今更神劍を取り戻したところで一族は貴方を受け入れたりしないわ。それに今の神劍ではリバス以外を受け入れたりしない」

「だからあの男を懐柔しようというのか？一族も腑抜け揃いになった物だ」

「それは貴方が！」

尚も抗議するエアーズを無視してゴーストは神劍の元へ辿り着き手を伸ばしてそれを拾う為に屈み込んで――。

「む？」

「チャンス！」

その背後から全力で蹴り飛ばした！

「ぐ！」

前のめりに倒れたゴーストの背後から押し掛かって自由を奪い取り、その上で両腕を拘束して――。

「目隠し！」

「はい」

受け取ったタオルで視界を奪う為に目隠しをして能力を封じた。

「貴様！離せ！」

「うっさい。黙れ」

俺――リバー스는腰の後ろから引き抜いた本物のミタマを引き抜いて柄で殴りつける。

「が！」

気を失う事はなかったがかなりの強さで殴りつけた為に抵抗が弱くなった。

「ど、どうして？」

現状がよく分からなかったのかゴールドとエアーズが俺と――窓の外に居るテンペストを交互に見て説明を求めている。

「テンペストの能力はゴーストに対して天敵になりうる能力だ。しかし眼鏡越しでは周囲300メートル程度の状況を『把握』するだけで精一杯。ゴーストを抑える為にはテンペストにこの場に来て貰う必要があった」

「いつから居たの？」

「初めから、と言いたい所だがエアーズの正体を暴露してから眼鏡で連絡してからこっちに向かって貰った。ここから俺達の住居まで近くはないが……」

「車で飛ばせばそれほど時間は掛からない。リバー스의時間稼ぎもあったしね」

「あ。それじゃ時間って……」

「そ。テンペストがこの場に到着するまでの時間って意味だ」

そもそもゴーストはエアーズを追って最初からこの場に潜んでいただろうし、あのタイミングで『時間』という意味はない。

「色々予定外の話をする事にはなったが予定通りゴーストの確保には成功した。エアーズ、一応これも俺の実績としては役に立つのか？」

「多分、ね」

複雑そうな顔で頷くエアーズ。まあ気持ちは分からないでもない。

「く。離せ、卑怯者が！」

「は。何を言っているんだか」

拘束され暴れまわるゴーストだが勿論拘束は緩まないので暴言を吐くしか出来ていない。そして言葉の応酬なら俺の得意分野だ。

「俺の何処が卑怯だって？」

「一人では何も出来ないくせに大きな口を叩くな！」

「だよ、エアーズ。コイツ反省なしみたいだ」

「・・・」

話を向けられたエアーズは沈黙して俯く。

「俺は確かにお前とは相性が悪いだろうよ。接近戦や特定方向からの狙撃がメインの能力者では視線に必殺の意味を持つお前とは対峙するだけで負けは必至だ。だが俺とテンペストが組めばお前など俺達の敵ではない。前に逃げ帰って警戒していたからこそ俺を一番に消しにきたのだろう？」

「ふざけるな！結局お前は一人では俺には勝てないと言っているんだ！」

「だから・・・」

俺は別に怒りもイラつきも覚えずに余裕で答えてやった。

「俺は元々一人で戦う気なんてないんだっての」

「それが卑怯だというんだ！それでも男か、お前は！」

それがエアーズという『女』の我慢の限界だった。

「む！」

エアーズはうつ伏せに倒れていたゴーストをひっくり返すと、そのまま馬乗りになって――。

「ごぶ！が！・・・く！」

両手で――しかも拳を使ってドカドカと殴り始めた！

「貴方が・・・貴方がそんなだから！」

殴っているのはエアーズ。殴られているのはゴースト。だが泣いているのはエアーズだった。

「貴方が！貴方は！貴方は――！！！」

延々と泣きながらゴーストを殴り続けるエアーズを尻目に――。

「どういう事ですか？」

流石に展開の読めないゴールドが俺に回答を求める。

「恐らくエアーズはゴーストの相棒、もしくは恋人に近い関係だったんだろ」

「でしたら何もあそこまでしなくとも・・・」

「だからこそ、だろ。お前もちょっとは男女の機微を身に着けた方が良いぞ」

「どういう意味ですか？」

「恋人で、しかも相棒でもあるにも拘らず全く頼って貰えなかったら、そりゃ怒るだろう普通」

「・・・あそこまで？」

既に意識のないゴーストを、それでも泣きながら延々と殴り続けるエアーズを見てかなり引き気味のゴールド。

「エアーズって我慢して溜め込むタイプなんだろ。恐らくゴーストが神剣を奪われて一時的にでも追放を免れたりしていたのもエアーズの功績だろうし、追放処分が決定するまであいつに情報を送り続けていたのも待っていたという事なんだろ」

「それでトドメが先程の言葉ですか。それは確かに爆発しますわね」

「男が一人で戦う事が正々堂々で潔いとも思っていたのかねえ」

言わせたのは俺なのだが正直ここまで爆発するとは思ってなかった。エアーズが一体どれだけ我慢して待ち続けていたのか想像がつ

かない。

「それに対して貴方は女を誑かして、利用して、散々使い尽くした挙句、再利用しようとする人ですからね。本当の意味で対極ですわ」

「お前とは一度じっくり話し合う必要がありそうだな」

「やめてください。妊娠するじゃないですか」

本気で孕ませたろか、この金髪。

第五章

「うおーい。まだなのかよ？」

「都会っ子は本気で体力がないですね。少しは出歩いたらどうですか？」

苦情を進言したら何故か諦められた発言で溜息を吐かれた。それが電車で5時間、バスで4時間、更に徒歩で6時間以上も歩いている俺への言葉か、このくそ女。

「兎に角、あと少しだから文句を言わずに着いてきてください」

「その言葉、何回目だと思ってんだ」

「確か26回目です」

「しっかり数えてんじゃねー！！」

流石に俺の目の前を延々と歩き続ける彼女——エアーズに切れそうだった。



事の起こりはゴーストを延々と殴り続けて後一步で死ぬという所まで追い込んだ為か、何故か凄くスッキリした顔のエアーズからの提案だった。

「兎に角、一度一族の本拠地まで来てください。上の人間はどう思うか分かりませんが私は貴方の事は少しだけ買っていますので」

その言葉に騙された俺はエアーズと共に一人で——人外や養殖能力者の同行を認められなかった為——歩き続けている訳だ。

「ところであれは放っておいて良いのか？」

「知った事じゃありません」

俺が親指で指した背後に対してエアーズはツンとそっぽを向いて知らん顔を決め込む。何を隠そう俺達の背後数十メートル後ろからは件のゴーストが追ってきているのだ。痣だらけの顔を晒しながら

「追放処分の奴を招き入れるみたいな真似して良いのか？」

「別に招き入れる気はありません。そもそも一族の本拠地まで着いてくれば捕まって放り出されるだけですし」

「あっそ」

多分エアーズとしては内心で何かを期待しているのだろう。

「お前って意外に一途な女だったんだな」

「訳の分からない事を言っていないでさっさと先を急ぎますよ」

「へいへい」

別にゴーストを危険視しなくなった訳ではないが今の奴には俺に構っている余裕などないだろう。何を考えているのかは知らないがあいつが追いかけているのは俺ではなくエアーズの筈だから。

「ここが本拠地なのか？」

「ええ」

足を棒にするくらい歩かされた俺が辿り着いた一族の本拠地の第一印象は――。

「本拠地とか隠れ家って言うより集落って感じだな」

余りにこぢんまりとしすぎていて対応にすら困るほどだった。

「今の一族の総数は100人に満たないもの。世界有数の能力者集団と言っても現状はこんな物よ」

「ふん」

まあゴールドの立ち上げる組織もそうだが大きければ良いというものではないらしい。

「それより長の下へと案内するわ。着いてきて」

「ああ」

俺はエアーズの後ろを着いていきながら背後を振り返ったがいつの間にかゴーストの姿は見えなくなっていた。

「初めましてリバス。私がここの責任者を勤めている者です」

「は、はあ。どうも」

俺は長に対していくつか予想していたが実際の人物は俺の予想していた者で一番可能性の低いと思っていた人物——中年の女性だった。おばさんと言うほど老けている訳ではないが若者と言うほど若くはない。そんな人物だった。

「噂の一族の本拠地がこんな辺鄙な所にある村でさぞ驚いたでしょう」

「それなりに」

「以前まではもっと活気があって人ももっと居ただけけれど十数年前に戦争があったの」

「十数年前の戦争？それって・・・」

「ええ。吸血鬼本国との戦争よ」

予想に違わぬ答えに俺は多少ならず驚いていた。

「確かに勝利したのは私達ですが吸血鬼側が思っているほど圧勝ではなかったのよ。一族の主力の殆どを投入したにも拘らず7割が死亡、残った者も無事ではなく数年の内に帰らぬ人となってしまった」
俺は隣に居たエアーズに視線を向けると無言で視線を逸らされた。
俺に真実を黙っていた事もあるがエアーズとしてはセシリアに確執があったのかもしれない。

「だから今の一族は慢性的な戦力不足なの。元々貴方達風に言えば能力者という者の出生率はそれほど高くなかった上に今は・・・」

長は言葉を切って視線を下げる。恐らくゴーストの離反を苦悩しているのだろう。

「話を続けますが私達が貴方と呼んだのは他でもありません。一族の出身ではないとは言え神剣の正規の契約者である貴方が我が一族に相応しいか見極める為です」

「それは聞いているが一応俺の方からも要望があるんだけど」

「分かっています」

長は頷きながら話を続ける。

「貴方が一族の戦力を今所属している組織に欲している事は理解しています、それは貴方の選定と深い関わりがあるのです」

「俺を選定し一族に受け入れると言う事が俺の所属する組織に力を貸す事に繋がるって訳？」

「多少語弊があるようですが、そう思って貰って構いません」

「ふーん。それで俺に何をさせようって訳？」

ゴールドには悪いが余りにも無茶な条件を突きつけられるならさっさと帰るつもりだった俺は気軽に質問をしたのだが――。

「平たく言うなら一族の女性との間に子供を作ってください」

「・・・」

あっさり帰ってきた答えに開いた口を塞がらなかった。

「えーと」

「一族が貴方を迎え入れる最低限の条件として貴方の因子に能力者を継承出来る力があるのかという事です。この際貴方の個人的な能力は重要ではなく貴方の子供が能力者として覚醒するかどうかが必要なのです」

エアーズの方へと視線を向けると直ぐに目線を逸らされた。つまりコイツは知っていた訳だ。

「お茶をどうぞ」

「ど、どうも」

絶妙のタイミングで侍女っぽい人がお茶を持ってきてくれたので俺は自身を落ち着ける為にズズと音を立ててから湯飲みを戻す。

「で？」

「なんででしょう？」

「俺が子供を作る云々は兎も角、相手は？」

「今この地には数名の女性能力者が存在します。彼女達が貴方のお相手と言う事になりますね」

「何もわざわざ俺を選ばなくても一族の男と子供を作らせれば良いんじゃないのか？」

「もったもな意見なのですが・・・」

長は何故か嘆息しながら説明を続ける。

「元々天然の能力者というのは男性には発露しにくい特性を持って

います。逆に女性は発露しやすいのですが大よその場合、腕輪の能力者と大差のない弱い能力しか発現しないというのが殆どです」

「つまり男の能力者は極端に少ない訳か」

「少ないと言うか・・・」

長はバツの悪そうな顔で――。

「今現在、一族出身の年頃の男性能力者はユーリ、貴方に分かりやすくいうならゴーストだけなのです」

「・・・」

少しだけ思考に待ったをかける。その上で少しだけ考える。

「それじゃなんで追放なんてしたんだ？」

「掟。という理由もあるのですが、はっきり言えばゴーストの性格上の問題です。彼は一族の中でも上位に位置する能力者ですが、それ故に他者に頼らずとも単独で全てを成せると思い込んでしまっている」

「つまり世間の厳しさを思い知らせる為に放り出したって事？」

長の話から結論を組み立てたが長は首を横に振った。

「彼の能力を知っていますか？」

「ん。確か視線で意味を殺す能力だったか？」

正確に知らされた訳ではないが俺はゴーストの能力をそう認識していた。それに対して長はまた首を横に振る。

「大まかには合っていますが『視線』という部分が間違えています。彼の能力は自らと類似する者を消去する能力なのです」

「類似？」

「彼は人間。だから類似する人間と言う種族を問答無用で消去出来る能力者。その際、視界に入れて認識する作業を組み込んであるので貴方は勘違いしていたのでしょう」

「・・・ちよつと待て」

類似する者を消去する能力？それは、つまり――。

「あいつは視界に入れた相手に自分との共通点を見出して、それを認識する事で消去するって事か？」

「ええ」

「なら一つ質問だ。その能力にあいつの意思は関わっているのか？」
「・・・いいえ」

納得した。恐らくゴーストは特殊な訓練を受けて認識の制御が出来るようにされた為に無差別に殺人を起こす事はないのだろう。だが、もしゴーストに子供が出来たら？言ってみればそれはゴーストにとっての類似の塊。いや、それ以前の話ゴーストが自分の子供が出来たと認識してしまったなら視線を使う必要がない以上、母体となる母親の中に居る子供を問答無用で消去する事になる。

平たく言えばゴーストはその能力故に子供を世に誕生させる事が出来ない能力者だったのだ。

「それは確かに追放される訳だ。あいつは子供が作れない上に他者との共存を望まない最強者。能力が強力であっても、いや強力だからこそ一族にとっては毒になる」

「まだそうと決まった訳ではありません。実際にユーリの子供を懐妊した者は居ないのでから」

俺の結論に反旗を翻したのはエアーズだった。

「貴方はまだそんな事を」

頑なな態度のエアーズに長が疲れたような嘆息して首を振る。それを見て俺は確信する。恐らく神剣を奪われたと言うのは口実でありゴーストを追放する事は事前に決定されていた事であり、そしてゴーストが追放を延期されていたのはやはりエアーズの功績であったのだと。

「で。話は分かったからを戻すけど俺のお相手は？」

「第一候補は彼女です」

長が指差した相手は——エアーズだった。

「ちょ、ちょっと待ってください！そんな話は聞いていません！」
当然のように抗議するエアーズだが——。

「言っていないのですから当然でしょう」

長は当然のように却下した。

「今一族の女性の能力者の中で一番強力な力を持っているのが貴方。そしてゴーストに期待出来ない以上、貴方がリバースの相手をするのは当然の事ではありませんか」

「し、しかし！」

尚も抗議するエアーズだが長はまるで相手をする気がないようにで何処吹く風だ。

それにしてもエアーズねえ。確かに嫌いではないが好みと言うほどの女性ではない。ゴーストから横取りと言う事なら嗜好にヒットさせる事も出来るだろうが、なんだか気が進まない。

まあ、それは兎も角この場合は――。

「話も膠着しているみたいだし俺は一旦引き上げさせて貰って……ぐ」

立ち上がりかけた俺は膝を着いて床に手を着く。

「やっと効いてきたみたいですね」

「な……に？」

「貴方は確かに優秀な能力者なのかもしれませんが少々迂闊すぎます。敵地かもしれない場所で出された飲み物に手を付けるなど油断しすぎではありませんか？」

「お、おま……え」

「心配しなくても毒などと言う無粋な物ではありません。遅効性の痺れ薬ですので半日もすれば動けるようになるでしょう。さて。入ってらっしゃい」

長が手を叩くと二人の男が部屋に入ってきて一人は俺を、一人はエアーズを取り押さえに掛かる。

「は、離しなさい！私……」

「そのまま子供が出来るまで地下牢に投獄して置きなさい。子供に支障が出ない程度の薬品なら使っても構いません」

「かしこまりました」

抵抗はしたもののあっさり捕らえられて拘束されてしまったエアーズ。そして俺に対しては拘束する必要がないと判断したのか、そ

のまま担ぎ上げ――。

「な〜んちって」

「ぐほ！」

俺の膝をまともに顔面に食らって男が倒れ付す。それを見て目を丸くする長に勝ち誇った笑みを浮かべる。

「飲む訳ないじゃん。信用出来ない奴らの淹れたお茶なんて」

俺がお茶に口をつけたのは言うまでもなく飲むふりだ。

「何が入っていたのか分からなかったからそっちの態度から演技してみたけど、こんなに簡単に騙されるなんてちよつと油断しすぎじゃないのかね？」

「なるほど。確かに少々貴方を甘く見ていたようですね」

長は素直に負けを認めるように頷いて見せるが、その表情にはまだ余裕がある。

「それでどうするつもりです？ 貴方の要望は最低限彼女と子供を作って貰わなければ聞くつもりはありませんよ」

主導権は向こうが握っているのだから当然と言えば当然だ。

「まあ、そう焦るなよ。戦国時代じゃないんだから10代の内に子供を作らないと行き遅れて訳でもないんだろ？」

「それは、まあそうですね」

「なら。エアーズに嫌々子供を作らせるより協力的になるように俺に彼女を口説く時間を貰いたい物だな。期限はそっちで指定して構わないから」

「そうきましたか」

長はじっくりと俺を観察してから指を一本立てる。

「一週間です。一週間でエアーズを口説き落としてみせなさい。出来なければ一族全員で貴方達を幽閉させてもらいます」

「了解した」

とりあえず一週間の猶予を手に入れた。

「どうしてこうなるの」

「お前って意外に不幸な奴だよな。男運も悪いし」

「放って置いて」

薬を投薬されるような事はなかったが結局俺とエアーズは同じ部屋に幽閉された。このまま最低でも一週間はエアーズと同じ部屋で過ごす羽目になるらしい。そして一週間でエアーズをその気にさせなければ薬漬けにされてエアーズと子作りする羽目になる訳だ。

「しかし、あいつ良い度胸だ事」

「？」

「ゴーストだよ、ゴースト。あいつお前が拘束されるのを見ても結局動かないでやんの」

「ユーリ、居たの？」

「逆に居ない方が不自然だろ。何処に居るのかまでは知らないが確実にお前を監視出来る位置に居た筈だがね」

「そ、そうなんだ」

エアーズは喜んでいるような悲しんでいるような微妙な顔をして考え込んでいる。

「しかし、どうするかねえ」

「何か手があって話を持ちかけたのではないの？」

「手が無かったから話を持ちかけて時間を稼いだと考えて欲しいね」

「そう。そうよね」

確実に監視の目が光っていて逃げ出すには分が悪すぎる状況。

「ゴーストの奴が助けに来てくれるというなら少しは勝算もあるが、実際の話どう思う？」

「分からない。ユーリが何を考えているかなんて昔から分かった試しがないもの」

「不確定要素か。状況は尚も悪くなるな」

俺とエアーズは嘆息してその場に座り込んだ。

★ 微風信号

部屋には私とリバースしかおらず外に出る事も出来なければ娯楽になるような物も何もない。結果、必然的に私はリバースと話をする事になる。

「とりあえず逃げ出す算段でも付けておく事にするか。エアーズ、この集落の広さとか大体の地形は分かるか？」

「ええ。貴方も見たと思うけどそれほど大きくないし回りは森に囲まれているわ。地下にもいくつか施設があるけれど一番問題になるのは外と内を分ける柵ね」

この集落の周辺にはこんな小さな集落には不釣り合いな柵が立てられている。リバースの『リバース エア反転滑走』ならば突破出来るかもしれないけれどアレは少々目立ちすぎる。隠密で脱出を計るなら出来れば外に出るまで使って欲しくないところだ。

「そう言えば前々から疑問だったんだがエアーズの能力ってどんなものなんだ？」

「今更それを聞いてくるんだ」

私は嘆息しながらも説明をする事にした。

私の能力『エアーズ シグナル微風信号』は単刀直入に言うならばハッキング能力といえは良い能力。電子機器などに電磁波に模した物を擬似的に作り上げ潜入させる。そうする事で私は電子機器、特にコンピュータネットワークのような物を自在に操り情報进行操作する事が出来る。

「だからこんな電気も通っていないような田舎では私の能力は何の意味もないわ」

「へえ。確かに今は役に立たないがお前って結構凄い奴だったんだな」

「・・・」

感心するリバースに少しだけ呆れ、少しだけ笑った。こんな状況なのに随分呑気な事だ。そう言えば彼の所に食事を作りに行っていた頃も同じような感想を持った事を思い出す。

「仮定の話になるが、ここから無事帰れたらお前やっぱりウチの組織に居座らないか？お前が居てくれると色々都合が良さそうだし」

「・・・考えておくわ」

結局、何の進展もないまま話は終わってしまった。

それから色々な事をリバスと話した。リバスは自分の事はしっかり理解しているのか自分の話題は少なめに私の事を多く聞いてきた。今の状況に役に立ちそうな事から立ちそうに無い事まで色々な事を。

だから時間が経つのは恐ろしく早く私達が閉じ込められて5日が経ってしまった。

残り時間は後二日。

「ねえ、そろそろ本格的に何とかしないと不味くない？」

「何とかと言われても。チャンスは外で何かアクシデントが起こるか、それとも時間切れになった瞬間か、そのくらいしかないからな。立てられる算段はもう話したろ？」

「それはそうだけど」

タイムリミット直後ならば最低限私達に投棄する為に誰かが接触してくる筈。それを機として脱出を計るのが私達に残された手段だった。

「上手くいくかな？」

「俺とお前なら大丈夫さ」

「そ、そうかな」

力強く頷いてくれたリバスの言葉に私は少しだけ気持ちが軽くなるのを感じる。そうだ。私は兎も角リバスが居てくれれば何とかなるような気がする。

タイムリミットが迫り、よく詳細な作戦を決め動く準備をしたりバスはとてつもなく頼りになった。

「初めに言っておくがヘマをしてもフォローなんてしてやらないかな」

「分かっているわ。私はミスなんてしないもの。貴方こそヘマをし

でも私はフォローなんてしないからね」

「減らず口」

「お互い様でしょう？」

軽口を叩きつつタイムリミットを待つ。自分でも意外だった。こんな切羽詰まった状況なのに不安を覚えていない自分に。

今の私ならどんな困難な作戦だろうと100%やり遂げられるような気がする。

「着たぞ」

「ええ。作戦通りに」

そして作戦はスタートした。

私達の元へ来た者をリバースが口八丁で騙し、鍵を奪い取って牢から脱出。その上で門番達を拘束して牢に叩き込んで地下牢から脱出。

表に出た私達は周囲に気を配りながら集落の東側に移動して柵に辿り着く。そして陽動としてここからリバースの『リバースエリア反転滑走』を西側の柵に向けて射出する！

柵に穴が空き、そこへ人が集中するのを確認してから私達は正面の策を破って集落の外へと脱出した。

ここまで来れば後は時間との勝負。

「行くぞ」

「ええ」

私はリバースに手を取られ、そのまま山道を駆け下りていく。そう。後は一族の手の届かない所まで逃げ切れば私達の勝ちだ！

「追っ手が来た」

「予想より早かったな」

背後に松明の火が見えて私達の後を追ってくる大量の人が見えた。でも不安にはならなかった。絶対に逃げ切れると言う確信が私にはあった。

「・・・」

私達の目の前にユーリが立ち塞がるまでは。

「どうして？」

その余りの理不尽さに私から出た声は自分でもぞっとするほど冷たかった。

「どうして貴方が邪魔をするの？あと少しなのに」

「踊らされているぞ。エコー」

エコー。それは私の愛称。私の本名から取られた一族から親しまれた愛称だった。

「気安くその名を呼ばないで」

それが今は酷く腹立たしい。

「冷静になれ。普段のお前なら今の状況がおかしいという事くらい理解出来る筈だ」

「状況がおかしいなんて百も承知よ。私は一族に売られたんだから」

「それが踊らされていると言っているんだ」

「黙りなさい！」

踊らされている？一体誰が私を躍らせているというのだ？躍らせているのは私の方だ。私が一族達を躍らせているのだ。

そう。今は私が絶対の優勢の位置にいるのだから！

「お前がそこまで自分を見失うとはな」

そんな私を見てユーリは普段通りの無表情で——しかし私だけの知っている悲しげな雰囲気を漂わせた。

だが今はユーリに構っている時間はない。一族の追っ手はもう直ぐそこまで来ているのだから。

「どいてユーリ。今は一族から逃げ切る事が何よりも優先なのよ」

「違う。お前にとって一番優先しなくてはならない事は一族から逃げ切る事などではない。お前が今一番しなくてはならない事は……」

ユーリは指で私を——私の——。

「その男から離れる事だ！」

リバースを指してきっぱりと言い切った。

「な、何を言って・・・」

リバースから離れるなんて出来る訳がない。だってリバースから離れてしまったら――。

「正気に返れ、エコー。お前は踊らされている。お前は『その男に』踊らされている！」

「！」

突き刺さる。その言葉が突き刺さる。その言葉が私を保っていた自信という支えに突き刺さる。

「考えてみる。何故その男はしびれ薬を飲んでいなかったにも拘らず一週間という時間を長に提示した？」

それはその方が『都合が良かったから』だ。

「思い出せ。何故その男は能力を封じられた訳でもないのに牢からお前を連れて脱出しなかった？」

それは単純に『必要が無かったから』だ。

「見てみる。お前の知る一族はこんなにも容易く脱出を許すような奴らだったか？」

「やめて」

それ以上言わないで。それ以上突きつけられてしまったら私は――。

「認めろ、エコー。お前は・・・」

「やめ・・・て」

私は――。

「一族とリバースに踊らされていたんだ！」

その事実気付かなくてはいけなくなる。

「・・・」

うつむく私の手は既にリバースと離れていた。離れた記憶は無か

ったが私が離れたのだという事は間違いなかった。

「随分と姑息な手を使う物だ」

「そうかね？」

「やはりお前は卑怯者だ。それも最低の卑怯者だ！」

「別に否定はしない。否定する材料もないし、否定する必要もないしな」

リバースとユーリの会話が私をすり抜けていく。

「こっちへ来い、エコー。この男はお前を利用しようとしているだけだ」

呆然とする私にユーリが手を差し伸べてくる。

対してリバースは――。

「当たり前だろ。俺はその女を誑かして、利用して、使い尽くした挙句、再利用までしてやろうとしているんだからな」

その事実をいっぺんたりとも否定しなかった。

「来るんだ、エコー。お前はそんな奴と居るべきではない！」

私を思いやる言葉で手を差し伸べるユーリ。

「来い、エアーズ。俺がお前を有効活用してやる」

私を道具とする為に手を差し伸べるリバース。

そんな考える必要もないような対照的過ぎる二者択一。

そうだ。私を取るべき手は――。



「な!？」

驚愕の声が漏れる。無論、俺からではなく正面のゴーストから。

「な、何故だ! エコー」

エアーズが俺の手を取って立ち上がったから。

「お前がどれだけエアーズと一緒に時間を過ごしたのかなんて知らないが短くはなかっただろう? それなのにお前は知らなかったのか?」

「な、なんだと？」

「エアーズには『誰かの役に立ちたい』って願望があるんだよ」
「！」

驚愕に目を見開くゴースト。どうやら本当に知らなかったらしい。
「なのにお前と着たらエアーズを危険に晒したくないからと言って一人で無理して、その上でエアーズを遠ざけようとした。頼って欲しいというエアーズの視線を全く無視してな」

「お、俺はエコーを・・・」

「愛していたんだろ？ 思いやっていたんだろ？」
「・・・」

「自分が危険な存在だからと遠ざけようとしたんだろう？ 彼女の手を汚したくないからと思いに気付かないふりをしてきたんだろう？」
「・・・」

「それがエアーズにとって苦痛でしかない事になんて気付かなかったんだろう？」

俺の言葉を受けてゴーストはエアーズに視線を向ける。エアーズはその視線を受けて目を逸らしつつ俺の手をぎゅっと握り締める。

「俺はエアーズを大事になんてしない。散々利用して俺の役に立ち続ける限り使い尽くしてやる。だからエアーズ、俺の役に立て。役に立ち続けろ」

「・・・はい」

俺の手を強く握ったまま、しかしエアーズは確かに俺の言葉に頷いた。

「待ってくれ。エコー。俺は・・・」

「もう一人は嫌なの！ 待ち続けるのは嫌なのよ！」

結局、最後までエアーズはゴーストと視線を合わせる事は無かった。

エピソード

確かに俺は一族と共にエアーズを躍らせていた訳だが別に一族と連絡を取り合っていた訳ではない。

唯、俺とエアーズが閉じ込められていた牢の情報は逐一上の方へと報告されているだろうと確信していただけ。だから俺は牢の中からも上の方にどのように動けば良いのかエアーズを前にしても指示を出せなし、上の方でも俺の意図をちゃんと汲んでくれた訳だ。

その上で、あの長は俺の立てた計画に『乗ってくれた』訳だ。



で。結局どうなったのかと言うと――。

「一族との同盟は完遂。エアーズも戦力として正式に加算されて特に私から言う事はありませんわね」

「俺は散々テンペスト達から殴られたけど」

「それは自業自得でしょう？ 貴方が愛されていると言う証拠でもありますわ」

ゴールドは機嫌良さそうに話すが俺と正面から目を合わせようとはしない。どうやら笑いを堪える為、痣だらけの俺の顔を直視出来ないらしい。失敬な。

「帰る」

「ああ。はい、ご苦勞様でした」

俺はゴールドの屋敷からさっさと退散して――。

「行くぞ」

「はい。アナタ」

表で待っていたエアーズの言葉に脱力しそうになった。

平たく言ってしまうえば俺とエアーズの間には一族間で使われる特

殊な婚姻が結ばれる事になった。婚姻が結ばれた以上は俺とエアーズは夫婦であり、夫婦であるならいずれ子供も出来るだろうと一族からは性急な子作りの要求は取り下げられた訳だ。

『一族間』のみで有効な婚姻である為、役所などは勿論通していないので世間的には俺とエアーズは他人のままだが――勿論テンペスト達は容認などしてくれなかった。

「帰ったらまたグチグチ嫌味言われるんだろうなあ」

「それは彼女達がアナタを愛している以上仕方のない事かと」

「ストレートに言われると本人に言われた訳でもないのに結構照れるからやめてくれ」

「そうなのですか？」

「普通そうだろ」

エアーズは少しだけ考え込んでから――。

「愛しています。アナタ」

俺を正面から見てきっぱりはっきり言い切った。

「・・・照れました？」

「お前、ちょっと性格変わったよな」

「そうですか？」

「いや。まあ、なんとなくだけど」

「ひょっとして今照れているのを誤魔化そうとしていませんか？」

「そういう事は気付いても言わないのが美德って物だ」

「そうかもしれないね」

言いつつ俺に寄り添って腕を絡ませてくる。貞淑なのか大胆なのか良く分からない女だった。

「そう言えばお前、俺に対する言葉遣いも変わったよな」

「妻たるもの夫には敬意を払うのが当然ではありませんか」

「こんな事を言ったらまたテンペスト達に怒られそうだが・・・」

「はい？」

「他人行儀に聞こえるから、もっと普通に話せ」

「はい♪」

その後も結局言葉遣いは直らなかつたが親密性は増したらしい。

「ところでゴーストの方はどうなってる？」

「はい。少々お待ちください」

エアーズは持ち歩いていた携帯端末を取り出して操作する。能力的な相性もあるのだろうかその操作は淀みなく美しいとすら思えた。

「第二班は現在一族を経由して南方で行動中のようです。通信は繋がられますが如何いたしましょう？」

「俺があいつと話したいように見えるか？」

「いいえ。全く」

「念の為に聞いてみただけだ。別に意味はない」

ゴーストはあれから一族への回帰を認められ、その上でゴールドの組織との同盟の為に出張で俺の第一班とは別行動の第二班の班長として行動している。

ゴーストが何故大人しく従っているのかは理解出来る気がしたが、その辺りは考えないようにしていた。少なくとも俺の隣に居るエアーズが無事である以上、あいつは俺の所属する組織の貴重な戦力となるのだから。

多分、あいつは俺がエアーズを使い尽くすつもりはあっても使い捨てるつもりはないという事も理解しているのだろう。

「さうと。次は何をしますかね」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1865j/>

反転・遊戯　ーリバーズ・ゲームー4（仮）

2010年10月8日14時41分発行